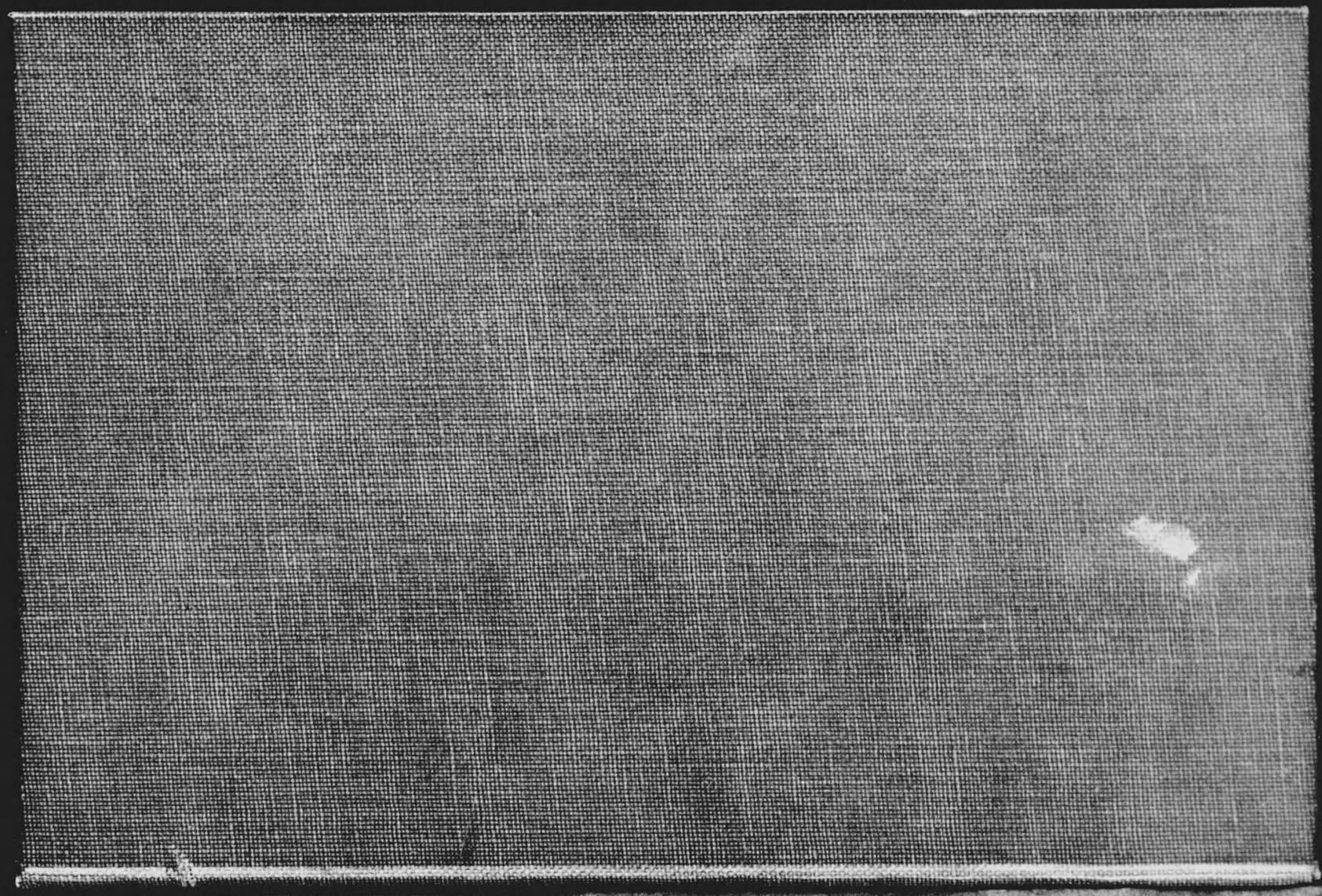

康診斷簿ニ記入スヘシ

第十五條 監獄法第十三條ニ依リ入監セシメサル場合ニ於テハ直ニ其ノ旨ヲ入監ヲ指揮シタル官廳及監獄所在地ノ廳、郡、支廳又ハ警察官署ニ通報シ仍其ノ事情ヲ臺灣總督ニ申報スヘシ

第十六條 新ニ入監スル者刑事訴訟法第五百四十四條及第五百四十六條各號ノ一ニ該當スルトキハ調査書類又ハ監獄醫員ノ診斷書ヲ添ヘ直ニ其ノ旨ヲ檢察官若ハ卽決官ニ通知スヘシ

前項ノ規定ハ在監中ノ者ニ之ヲ準用ス

第十七條 新ニ入監スル者アルトキハ疾病其ノ他已ムコトヲ得サル場合ヲ除ク外入浴ヲ爲サシムヘシ

婦女ノ入浴ニハ女監取締之ニ立會ヒ婦女ノ身體及衣類ノ檢査ハ女監取締之ヲ爲スヘシ

前項ノ規定ハ在監中ノ婦女ノ入浴及身體、衣類ノ檢査ニ之ヲ準用ス

第十八條 入監者ニハ番號ヲ附シ在監中其ノ番號票ヲ上衣ノ襟又ハ胸部ニ附著セシムヘシ但シ本人監外ニ在ル間ハ番號票ヲ除去セシムルコトヲ得

第十九條 典獄ハ在監者ノ遵守スヘキ事項竝刑期ノ起算及終了ノ日ヲ入監者ニ告知スヘシ

在監者遵守事項ハ冊子ト爲シ之ヲ監房內ニ備ヘ置クヘシ

第二十條 典獄ハ入監者ノ身上ニ關スル事情ヲ調査シ其ノ結果ヲ身上票ニ記載スヘシ

前項ノ調査ヲ爲スニ付必要アリト認ムルトキハ他ノ官署公署又ハ本人ニ緣故アル者ニ照會ヲ爲スヘシ

第二十一條 典獄ニ於テ必要アリト認ムルトキハ入監者ノ撮影ヲ爲スヘシ在監中ノ者ニ付亦同シ

第二十二條 入監者ノ身分帳、在監者名簿及放免歷簿ハ收監後三日以內ニ整理スヘシ

第三章 拘禁

第二十三條 刑事被告人ハ成ルヘク之ヲ獨居拘禁ニ付スヘシ

受刑者ニシテ餘罪又ハ刑期限內ノ犯罪ニ因リ審問中ニ在ルトキ亦同シ

第二十四條 受刑者ハ本令ニ特別ノ規定アル場合ヲ除クノ外成ルヘク左ノ順序ニ從ヒ之ヲ獨居拘禁ニ付スヘシ

一 刑期二月未滿ノ者
二 二十五歲未滿ノ者
三 初犯ノ者
四 入監後二月ヲ經過セサル者

獨居監房ニ殘餘アルトキハ前項ニ該當セサル受刑者ト雖之ヲ獨居拘禁ニ付スルコトヲ得

第二十五條 精神又ハ身體ニ害アリト認ムル在監者ハ之ヲ獨居拘禁ニ付スルコトヲ得ス

第二十六條 獨居拘禁ノ期間ハ二年ヲ超ユルコトヲ得ス但シ特ニ繼續ノ必要アル場合ニ於テハ爾後六月毎ニ其ノ期間ヲ更新スルコトヲ妨ケス

十八歲未滿ノ者ハ特ニ必要アリト認メタル場合ヲ除ク外六月以上繼續シテ之ヲ獨居拘禁ニ付スルコトヲ得ス

第二十七條 典獄、監獄醫員及敎誨師ハ少クモ十日ニ一回其ノ他ノ監獄官吏ハ毎日一回以上獨居拘禁ニ付セラレタル在監者ヲ巡視スヘシ

第二十八條 典獄、監獄醫員、敎誨師及女監取締ヲ除ク外監獄官吏ハ單獨ニテ獨居拘禁ニ付セラレタル婦女ヲ巡視スルコトヲ得ス夜間獨居監房ニ拘禁セラレタル婦女ノ巡視ニ付亦同シ

第二十九條 獨居拘禁ニ付セラレタル在監者ヲ巡視シタル監獄官吏ハ其ノ視察シタル事項ヲ典獄ニ報告スヘシ

第三十條 獨居拘禁ノ期間滿了後必要アリト認ムル者ハ之ヲ夜間獨居監房ニ拘禁スヘシ

第三十一條 夜間獨居監房ニ拘禁セラレタル者ニシテ作業ニ就カシメサルトキハ晝間ト雖仍在房セシムヘシ

第三十二條 病者又ハ不具者ト健康者トハ之ヲ同一監房ニ拘禁スルコトヲ得ス但シ看護ニ從事スル者ハ此ノ限ニ在ラス

第三十三條 雜居監房ニハ三人以上ヲ拘禁スヘシ但シ療養其ノ他已ムコトヲ得サル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第三十四條 雜居監房、工場、敎場及敎誨堂ニ於テハ在監者ノ席次ヲ定メ交談ヲ禁止スヘシ

第三十五條 監房ニハ疊ヲ敷クコトヲ得ス但シ拘置監、女監及病監ハ此ノ限ニ在ラス

第三十六條 監房ノ前ニハ小札ヲ揭ケ其ノ上部ニ在房者ノ氏名、年齡、罪質、刑名、刑期、留置期間及犯數其ノ下部ニ番號及入監ノ年月日ヲ記載シ上部ハ之ヲ蔽掩シ置クヘシ

第三十七條 雜居監房ニハ其ノ現在人員ヲ記載シタル小札ヲ揭クヘシ

第四章 戒護

第三十八條 監獄ニ於テハ出入ノ警戒ヲ嚴ニシ必要アリト認ムルトキハ出入者ノ携帶品ヲ檢査スヘシ

開監前閉監後ハ典獄ノ許可アルニアラサレハ監獄官吏以外ノ者ヲ出入セシムルコトヲ得ス

第三十九條 監獄ノ外門、各出入口、監房、工場及現ニ在監者ヲ拘禁スル場所ハ之ヲ閉鎖シ置クヘシ若シ必要ニ因リ一時開放スルトキハ其ノ要所ヲ守衞スヘシ

鑰匙ハ一定ノ監獄官吏之ヲ保管シ必要アル場合ニアラサレハ其ノ授受ヲ爲スコトヲ得ス

第四十條 監獄官吏ハ典獄ノ命令アルニアラサレハ他ノ監獄官吏ノ立會ナクシテ監房ヲ開扉シ又ハ在監者ヲ出房セシムルコトヲ得ス但シ病監ニ在リテハ此ノ限ニ在ラス

第四十一條 監獄ノ構內ニ於テハ常ニ視察ノ便ヲ計リ觀望ヲ妨ケ其ノ他戒護ノ障礙ト爲ルヘキ物ヲ置クヘカラス

已ムコトヲ得サル場合ニ於テ梯子其ノ他攀越ノ用ニ供シ得ヘキ物ヲ構內ニ置クトキハ之ニ鎖鑰ヲ施スヘシ

第四十二條 典獄ハ監獄官吏ヲシテ少クモ毎日一回監房ノ檢査ヲ爲サシムヘシ

第四十三條 典獄ハ監獄官吏ヲシテ工場又ハ監外ヨリ還房スル在監者ノ身體及衣類ノ檢査ヲ爲サシムヘシ

第四十四條 戒護ノ爲離隔ノ必要アル在監者ハ之ヲ獨居拘禁ニ付スヘシ

第四十五條 戒具ハ左ノ六種トス

一 窄衣

二　鈦
三　手錠
四　足鎖
五　聯鎖
六　捕繩

鈦ヲ使用スルニハ鐵丸ヲ屬シタル鐵索ヲ之ニ貫キ腰間ニ線帶セシメ線帶ノ所ニ下鍵ス

聯鎖ヲ使用スルニハ之ヲ腰間ニ線帶セシメ線帶ノ所ニ下鍵シ二人毎ニ連絆ス

第四十六條　戒具ハ典獄ノ命令アルニアラサレハ之ヲ使用スルコトヲ得ス

第四十七條　窄衣ハ危險ナル暴行ヲ爲ス懲役囚、鈦及足鎖ハ逃走又ハ暴行ノ虞アル懲役囚、手錠及捕繩ハ暴行、逃走若ハ自殺ノ虞アル在監者又ハ護送中ノ在監者、聯鎖ハ監房外ノ作業ニ就ク懲役囚ニシテ必要アリト認ムル者ニ限リ之ヲ使用スルコトヲ得

窄衣ハ六時間以上、兩脚施鈦ハ六月以上、一脚施鈦ハ一年以上繼續シテ之ヲ使用スルコトヲ得ス

護送中ノ者ニハ窄衣、足鎖及鈦ヲ使用スルコトヲ得ス

第四十八條　監獄官吏在監者ニ對シテ劍又ハ銃ヲ使用シタルトキハ典獄ハ直ニ其ノ旨ヲ臺灣總督ニ申報スヘシ

第四十九條　典獄ハ刑期一年以上ノ懲役囚ニシテ刑期ノ半ヲ經過シタル者ノ中ニ就キ豫メ消防ノ用務ニ就カシムヘキモノヲ指定スルコトヲ得

第五十條　監獄法第二十二條ニ依リ在監者ヲ解放スルトキハ出頭スヘキ期間及場所ヲ告知スヘシ

第五十一條　在監者ヲ他所ニ護送スヘキ場合ニ於テハ監獄醫員ヲシテ之ヲ診斷セシメ健康ニ害アリト認ムルトキハ其ノ護送ヲ停止スヘシ

護送ヲ停止シタルトキハ其ノ旨ヲ關係官廳ニ通報スヘシ

第五十二條　護送中ハ男女ヲ同行セシムヘカラス刑事被告人ニシテ被告事件ノ相關連スルモノ亦同シ

第五十三條　在監者逃走シタルトキハ典獄ハ速ニ監獄所在地及其ノ附近竝逃走者ノ立寄ルヘキ見込アル地方ノ廳、郡、支廳又ハ警察官署ニ逃走者ノ人相書ヲ添ヘ逃走ノ事實ヲ通報スヘシ

第五十四條　前條ノ場合ニ於テハ典獄ハ其ノ事實ヲ臺灣總督ニ申報スヘシ逃走者ヲ逮捕シタルトキ亦同シ

逃走者刑事被告人ナルトキハ前項ノ報告ヲ爲ス外逃走及逮捕ノ事實ヲ檢察官ニ通報スヘシ

第五章　作業

第五十五條　在監者ノ作業時間ハ臺灣總督之ヲ定ム

典獄ハ地方ノ狀況、監獄ノ構造又ハ作業ノ種類ニ因リ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ作業時間ヲ伸縮スルコトヲ得

請求ニ因リ作業ニ就ク者ノ作業時間ハ二時間以內短縮スルコトヲ得

教育、教誨及運動ニ要スル時間ハ之ヲ作業時間ニ通算スルコトヲ得

第五十六條　作業ノ種類ハ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

第五十七條　在監者ニ課スル作業ハ其ノ種類及一日ノ科程ヲ指定シ之ヲ本人ニ告知スヘシ

第五十八條　作業科程ハ普通一人ノ仕上高及第五十五條第一項ノ作業時間ヲ標準トシテ等一ニ之ヲ定ムヘシ

仕上高ヲ標準トスルコト能ハサル作業ニ付テハ第五十五條第一項ノ作業時間ヲ以テ作業科程トス

十八歲未滿ノ受刑者、老者、病弱者及不具者ハ前二項ニ依ラス各就業者ニ付相當ノ作業科程ヲ定ムルコトヲ得

第五十九條　作業時間ノ全部ヲ通シテ就業セシムルコト能ハサル作業ハ之ヲ他ノ作業ト併課スルコトヲ得

第六十條　一日ノ作業科程ヲ終了シタル者ト雖作業時間內ハ繼續シテ作業ニ就カシムヘシ

第六十一條　請求ニ因ル就業者ニハ正當ノ事由アルニアラサレハ其ノ作業ノ中止、廢止若ハ變更ヲ許サス

第六十二條　刑事被告人ハ之ヲ監外ノ作業ニ就カシムルコトヲ得ス

刑期六月ニ滿タス又ハ受刑後三月ヲ經過セサル受刑者ハ特別ノ事由アル場合ノ外監外ノ作業ニ就カシムルコトヲ得ス但シ十八歲未滿ノ受刑者ヲ監外ノ農業ニ就カシムルハ此ノ限ニ在ラス

第六十三條　典獄ハ監獄官吏ヲシテ毎日一回各就業者ニ就キ作業ノ成績ヲ檢査セシムヘシ

第六十四條　仕上高ハ毎月末日ニ其ノ月分ヲ積算シ一日ノ平均高ト一日ノ科程トヲ對照シ作業科程ノ了否ヲ定ムヘシ

第五十八條第二項ノ作業ニ付テハ一月毎ニ其ノ就業時間ヲ積算シ前項ノ例ニ依リ作業科程ノ了否ヲ定ムヘシ

第六十五條　前條ニ依リ作業科程ノ了否ヲ定メタルトキハ作業賞與金ノ計算ヲ爲スヘシ

第六十六條　左ニ揭クル者ニハ作業賞與金ノ計算ヲ爲サス

一　入監シタル翌月ヨリ二月ヲ經過セサルモノ
二　釋放ノ月ニ該ルモノ
三　行狀不良ニシテ作業成績劣等ナルモノ

就業日數十五日ニ滿タサル者ニハ作業賞與金ノ計算ヲ爲ササルコトヲ得

第六十七條　作業賞與金ハ行狀、性向、作業ノ種類、成績、科程ノ了否ヲ斟酌シ臺灣總督ノ定ムル所ニ依リ計算スヘシ

第六十八條　監獄法第二十五條第四項ニ依リ作業ニ就キタル者ニハ前條ニ依リ計算シタル額ヲ增加スルコトヲ得

第六十九條　就業者ニハ毎月十五日迄ニ前月分ノ作業賞與金計算高ヲ告知スヘシ

第七十條　作業賞與金ハ釋放ノ際之ヲ給與ス

作業賞與金ヲ給與スル場合ニ於テ必要アリト認ムルトキハ條件ヲ指定スルコトヲ得

作業賞與金ハ其ノ計算高ヲ有スル者生計上必要ナキトキハ全部又ハ一部ヲ給與セサルコトヲ得

第七十一條　十圓以上ノ作業賞與金計算高ヲ有スル受刑者其ノ父、母、妻若ハ子ノ扶助、犯罪被害者ニ對スル賠償又ハ書籍ノ購求其ノ他必要アル場合及作業ノ成績特ニ優良ナル者ニ對シテハ情狀ニ因リ在監中ト雖作業賞與金計算高ノ三分ノ一ヲ超過セサル金額ヲ給スルコトヲ得

受刑者ノ爲特ニ必要アリト認ムヘキ場合ニ於テハ前項ノ規定ニ依ラス之ニ作業賞與金ヲ給スルコトヲ得

第七十二條　作業賞與金計算高ヲ有スル刑事被告人其ノ父、母、妻又ハ

子ノ扶助其ノ他正當ノ費用ヲ要スル場合ニ於テハ情狀ニ因リ在監中ト雖之ニ作業賞與金ヲ給スルコトヲ得

第七十三條　作業賞與金計算高ヲ有スル在監者逃走若ハ死亡シタルトキハ其ノ計算高ヲ抹消スヘシ但シ死亡ノ場合ハ情狀ニ因リ其ノ父、母、妻又ハ子ノ扶助ノ爲其ノ計算高ノ一部若ハ全部ヲ給スルコトヲ得

第七十四條　監獄法第二十一條及第二十八條ニ依リ手當金ヲ給スヘキ情狀アリト認ムルトキハ典獄ハ調査書類ヲ添ヘ其ノ旨ヲ臺灣總督ニ具申スヘシ

第六章　教誨及教育

第七十五條　教誨ハ休業日又ハ日曜日ニ於テ之ヲ爲スヘシ

必要アリト認ムルトキハ前項以外ノ日ニ於テモ教誨ヲ爲スコトヲ得

第七十六條　病監又ハ獨居監房ニ拘禁スル受刑者及刑事被告人ニハ其ノ居所ニ就キ教誨ヲ爲スヘシ

第七十七條　受刑者父母ノ訃ニ接シ就業ヲ免セラレタルトキハ之ヲ獨居拘禁ニ付シ教誨ヲ爲スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ本人ノ希望ニ因リ其ノ亡父母ノ爲讀經ヲ爲サシムルコトヲ得

第七十八條　恩赦、假出獄者ハ假出場ノ申渡ヲ爲ストキハ其ノ式場ニ成ルヘク他ノ受刑者ヲ集メテ教誨ヲ爲スヘシ

第七十九條　受刑者死亡シタルトキハ本人ト緣故アル受刑者ヲ集メ棺前ニ於テ教誨ヲ爲スヘシ

第八十條　監獄法第三十條ニ依リ教育ヲ施スヘキ受刑者ニハ毎日四時間以內其ノ教育ノ程度ニ應シ修身、讀書、算術、習字其ノ他必要ノ學科ヲ教授スヘシ

第八十一條　文書圖畫ノ閱讀ハ監獄ノ紀律ニ害ナキモノニ限リ之ヲ許ス

新聞紙及時事ノ論說ヲ記載シタルモノハ其ノ閱讀ヲ許サス

第八十二條　雜居拘禁ノ在監者ニハ同時ニ三箇以上ノ文書圖畫ヲ閱讀セシムルコトヲ得ス但シ字書ハ此ノ限ニ在ラス

第八十三條　獨居拘禁ノ在監者ニハ情狀ニ因リ其ノ監房內ニ於テ自辨ニ係ル筆墨紙ノ使用ヲ許スコトヲ得

第七章　給養

第八十四條　在監者ノ使用ニ供スル衣類臥具及雜具ノ品目ハ左ノ如シ

衣類
一　單衣
二　袷
三　襯衣
四　帶
五　褌（內地人ニ限ル）
六　袴（內地人婦女作業ニ就ク場合ハ前垂トス）

臥具
一　毛布
二　莞莚
三　敷布（病者ニ限ル）
四　枕
五　蚊幮

雜具
一　手巾
二　雨具
三　冠物
四　履物
五　櫛
六　髮尾（辮髮用）
七　足布（纏足用）

前項ノ外必要アリト認ムルトキハ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ其ノ品目ヲ增加スルコトヲ得

用紙ハ別ニ之ヲ給與シ作業ニ就ク者ニハ別ニ作業衣一組ヲ貸與ス

第八十五條　在監者ノ使用ニ供スル衣類、臥具及雜具ノ數ハ一人ニ付一箇トス但シ莞莚、櫛及蚊幮ハ數人ニ一箇ヲ毛布ハ一人ニ五枚以內ヲ使用セシムルコトヲ得

前項ノ規定ハ病者ニ對シテハ必要ニ因リ之ヲ增減スルコトヲ得

用紙ノ數量ハ適宜之ヲ定ム

第八十六條　受刑者ニ著用セシムル衣類ハ赭色トス

左ニ揭クル衣類ハ淺葱色トス
一　刑事被告人及勞役場留置者ニ貸與スル衣類
二　十八歲未滿ノ受刑者ニ著用セシムル衣類
三　處遇上必要ト認メタル受刑者ニ著用セシムル衣類

第八十七條　在監者ノ使用ニ供スル衣類ハ通常服ト就業服トニ別チ總テ筒袖トス

本島人及清國人ノ衣類ハ本島ノ製ニ準シ外國人ノ衣類ハ洋服ノ製ニ準ス

第八十八條　自辨ノ衣類、臥具ハ紀律及衞生ニ害ナキ物ニ限ル其ノ品目及箇數ハ典獄之ヲ定ム

第八十九條　自辨ノ衣類、臥具ヲ監獄ニ於テ補綴又ハ澣濯シタル費用ハ本人ノ負擔トス

第九十條　在監者ニ給與スル糧食ノ種類及分量ハ左ノ如シ
一　飯（下白米七合甘藷三百匁）　一人一回三合以下
二　菜　一人一日三錢以下

地方ノ狀況若ハ物價ノ高低ニ因リ又ハ在監者ノ健康保全ノ爲必要アルトキハ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ糧食ノ種類ヲ變更スルコトヲ得

作業ノ爲必要アルトキハ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ糧食ヲ增給スルコトヲ得

第九十一條　在監者ニ給與スル飮料ハ白湯トス但シ特ニ必要アルトキハ麥湯又ハ茶ヲ用ウルコトヲ得

第九十二條　在監者ニハ酒類、煙草又ハ阿片ヲ用フルコトヲ許サス

第九十三條　病者ノ糧食及飮料ハ典獄ニ於テ適宜之ヲ定ムルコトヲ得

第九十四條　自辨糧食ノ種類及分量ハ典獄之ヲ定ム

第九十五條　自辨糧食ノ販賣又ハ取扱ヲ爲ス者不正ノ行爲アリト認ムルトキハ典獄ハ其ノ者ノ出入ヲ禁止スヘシ

典獄ハ必要ニ因リ自辨糧食ノ販賣又ハ取扱ヲ爲ス者ヲ指名スルコトヲ得

第九十六條　自辨糧食ハ監獄官吏立會ノ上監獄醫員之ヲ檢査スヘシ

第八章 衞生及醫療

第九十七條 衣類、臥具及雜具ハ期限ヲ定メ蒸氣其ノ他適當ノ方法ヲ用ヒテ之ヲ清淨ナラシムヘシ

第九十八條 受刑者ノ頭髮ハ少クモ一月每ニ一回、鬚髯ハ少クモ十日每ニ一回之ヲ翦剃セシムヘシ特別ノ事情アル者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

婦女ノ頭髮ハ必要アル場合ヲ除ク外之ヲ翦剃セシムルコトヲ得ス

婦女ノ頭髮ハ特ニ必要アルトキハ膏油ノ使用ヲ許スコトヲ得

第九十九條 在監者ノ入浴度數ハ作業ノ種類及其ノ他ノ事情ヲ斟酌シテ典獄之ヲ定ム但シ五月ヨリ十月マテハ三日每ニ一回、十一月ヨリ四月マテハ五日每ニ一回ヲ下ルコトヲ得ス

第百條 在監者ニハ雨天ノ外每日三十分以內戶外ニ於テ運動ヲ爲サシムヘシ但シ作業ノ種類ニ因リ運動ノ必要ナシト認ムヘキ者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ運動時間獨居拘禁ニ付シタル者ニ限リ一時間迄ニ伸長スルコトヲ得

受刑者ニハ戶外運動トシテ體操ヲ爲サシムルコトヲ得

第百一條 獨居拘禁ニ付シタル在監者ニシテ十八歲未滿ノ者ハ少クモ三十日每ニ一回、其ノ他ノ者ハ少クモ三月每ニ一回、雜居拘禁ニ付シタル受刑者ニシテ刑期一年以上ノ者ハ少クモ六月每ニ一回監獄醫員ヲシテ其ノ健康ヲ診斷セシメ之ヲ健康診斷簿ニ記入スヘシ

第百二條 十八未滿ノ者ハ其ノ他ノ者ト治療ノ時間及病監ニ於ケル居室ヲ異ニスヘシ

第百三條 獨居拘禁ニ付シタル者疾病ニ罹リタルトキハ病監ニ移ス必要アル場合ヲ除ク外其ノ監房ニ於テ治療セシメ病監ニ移シタルトキハ成ルヘク病監內ノ獨居監房ニ拘禁スヘシ

第百四條 傳染病流行ノ兆アルトキハ其ノ豫防ヲ嚴ニシ流行地ヲ發シ又ハ其ノ地方ヲ經過シタル入監者ハ一週日以上他ノ者ト離隔シ其ノ携帶物ニハ消毒ヲ爲スヘシ

第百五條 傳染病豫防ノ爲必要アリト認ムルトキハ在監者ニ種痘又ハ血精注射ヲ施スコトヲ得

第百六條 傳染病流行ノ際ニハ飲食物ノ差入及購求ヲ停止スルコトヲ得

第百七條 在監者傳染病ニ罹リタルトキハ直ニ之ヲ離隔シ嚴ニ消毒ヲ爲シ其ノ狀況ヲ臺灣總督ニ申報スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ監獄所在地ノ廳、郡、支廳、市、街、庄又ハ警察官署ニ其ノ事實ヲ通報スヘシ

第百八條 監獄法第四十三條ニ依リ在監者ヲ病院ニ移送スヘキトキハ典獄ハ監獄醫員ノ診斷書及移送スヘキ病院トノ協議書ヲ添ヘ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

第百九條 在監者ヲ病院ニ移送シタルトキハ典獄ハ監獄官吏ヲシテ每日其ノ狀況ヲ視察セシムヘシ

第百十條 病院ニ移送シタル者在院ノ必要ナキニ至リタルトキハ典獄ハ速ニ之ヲ還送セシメ臺灣總督ニ其ノ旨ヲ申報スヘシ

第百十一條 治療ノ爲特ニ必要アリト認ムルトキハ典獄ハ監獄醫員ニアラサル醫師ヲシテ治療ヲ補助セシムルコトヲ得

分娩ノ際必要アリト認ムルトキハ典獄ハ產婆ヲ付スルコトヲ得

第百十二條 在監者ノ疾病危篤ナルトキハ其ノ旨ヲ本人ヘ家族又ハ親族ニ通知シ刑事被告人ナルトキハ仍檢察官ニ通報スヘシ

第九章 接見及信書

第百十三條 十四歲未滿ノ者ニハ在監者ト接見ヲ爲スコトヲ許サス

第百十四條 接見ノ時間ハ三十分以內トス但シ辯護人トノ接見ハ此ノ限ニ在ラス

第百十五條 接見ハ執務時間內ニアラサレハ之ヲ許サス

第百十六條 接見ノ度數ハ拘留囚ニ付テハ十日每ニ一回、禁錮囚ニ付テハ一月每ニ一回、懲役囚ニ付テハ二月每ニ一回トス

第百十七條 典獄ニ於テ已ムコトヲ得サル事情アリト認ムルトキハ前四條ノ制限ニ依ラサルコトヲ得

第百十八條 在監者ニ接見セムコトヲ請フ者アルトキハ其ノ氏名、身分、職業、住所、年齡、在監者トノ續柄及面談ノ要旨ヲ聞取ルヘシ

接見ノ許可ヲ與ヘタル者ニハ接見心得事項ヲ告知スヘシ

接見者辯護人ナルトキハ其ノ氏名、職業及住所ノミヲ聞取リ法院ノ允許ヲ得テ辯護人ト爲リタル者ニハ仍其ノ旨ヲ證明セシムヘシ

第百十九條 接見ハ接見室ニ於テ之ヲ爲サシムヘシ

在監者疾病ノ爲接見室ニ行クコト能ハサルトキハ其ノ居所ニ於テ接見セシムルコトヲ得

第百二十條 接見ニハ監獄官吏之ニ立會フヘシ

第百二十一條 外國語ハ典獄ノ許可アルニ在ラサレハ接見ノ際之ヲ使用スルコトヲ得ス

第百二十二條 接見者面談要旨ニ違ヒタル談話ヲ爲シ又ハ姿貌其ノ他ノ形狀等ヲ以テ相通スルノ形跡アルトキハ之ヲ停止スヘシ

第百二十三條 受刑者ノ發受スル信書ノ數ハ拘留囚ニ付テハ十日每ニ各一通、禁錮囚ニ付テハ一月每ニ各一通、懲役囚ニ付テハ二月每ニ各一通ヲ超ユルコトヲ得ス

典獄ニ於テ已ムコトヲ得サル事情アリト認ムルトキハ前項ノ制限ニ依ラサルコトヲ得

第百二十四條 在監者ノ發受スル信書ハ典獄之ヲ檢閱スヘシ

發信ハ封緘ヲ爲サスシテ之ヲ典獄ニ差出サシメ受信ハ典獄之ヲ開披シ檢印ヲ押捺スヘシ

第百二十五條 外國文ヲ用ヒタル信書ハ檢閱ノ爲在監者ノ費用ヲ以テ之ヲ翻譯セシムルコトヲ得

在監者前項ノ費用ヲ負擔スル資力ナク又ハ其ノ負擔ヲ肯セサルトキハ信書ノ發受ヲ許ササルコトヲ得

第百二十六條 受刑者ノ發送スル信書ハ日曜日、休業日又ハ休憩時ニ於テ之ヲ作成セシムヘシ但シ急速ヲ要スルモノト認ムル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第百二十七條 在監者信書ヲ自書スルコト能ハサルトキハ本人ノ求ニ因リ監獄官吏之ヲ代書スヘシ

第百二十八條 在監者ノ發送スル信書ノ郵便稅ハ自辨トス

法院其ノ他ノ公務所ニ對シ返信ヲ要スル場合ニ於テ郵便稅ヲ自辨スルコト能ハサルトキハ監獄ニ於テ之ヲ支辨スヘシ

書信用紙及封筒ハ監獄ニ於テ之ヲ給與スルコトヲ得

第百二十九條 在監者ニ交付シタル信書及其ノ他ノ文書ハ必要ニ因リ十

日以內本人ノ手ニ留置セシムルコトヲ得

第百三十條 信書ノ發送、交付及廢棄ノ年月日竝其ノ要旨ハ之ヲ一定ノ帳簿ニ記載スヘシ

第百三十一條 第百二十三條ニ定メタル度數ニ超エタル信書ニシテ發信ニ係ルモノハ直ニ本人ニ還付シ受信ニ係ルモノハ別ニ保管シ置キ次ノ期間ニ於テ順次之ヲ本人ニ交付スヘシ

監獄法第四十七條第一項ニ依リ發受ヲ許ササル信書ハ身分帳ニ添附シ置キ廢棄スヘキモノヲ除ク外釋放ノ際之ヲ本人ニ交付スヘシ

第百三十二條 接見ノ立會及信書ノ檢閲ノ際行刑上參考ト爲ルヘキ事項ヲ發見シタルトキハ其ノ要旨ヲ本人ノ身分帳ニ記載スヘシ

第十章 領置

第百三十三條 領置物ハ其ノ品目及數量ヲ領置金品ノ基帳ニ記載シ領置品基帳ニハ典獄之ニ證印スヘシ

第百三十四條 金錢ニアラサル領置物ハ本人ノ請求ニ因リ之ヲ賣却シテ其ノ代金ヲ領置スルコトヲ得

領置ヲ爲サス又ハ領置ヲ解キタル物ニ付本人相當ノ處分ヲ爲ササルトキハ請求ナキトキト雖前項ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第百三十五條 在監者ニハ新聞紙、時事ノ論說ヲ記載シタル文書及監獄ノ紀律ヲ害スヘキ物ノ差入ヲ爲スコトヲ得ス

第百三十六條 受刑者ニハ法令其ノ他典獄ニ於テ有益ト認ムル文書、筆墨紙、印紙、郵便切手、郵便端書、金錢及臺灣總督ニ於テ認可シタル物ヲ除ク外差入ヲ爲スコトヲ得ス但シ自辨ヲ許シタル物ハ此ノ限ニ在ラス

第百三十七條 刑事被告人ニハ前條ニ揭ケタル物ノ外衣類、臥具、飮食物、手巾及履物ニ限リ差入ヲ爲スコトヲ得

第百三十八條 差入ノ衣類臥具ニ付テハ第八十八條差入ノ飮食物ニ付テハ第九十四條ノ規定ヲ準用ス

第百三十九條 在監者ニ差入ヲ爲スコトヲ請フ者アルトキハ其ノ氏名身分、職業及住所ヲ調査スヘシ

第百四十條 在監者ニ宛テ送致シ來リタル物及差入ヲ爲シタル物ハ監獄官吏立會ノ上看守之ヲ檢査スヘシ

飮食物ノ檢査ニハ仍監獄醫員ヲシテ立會ハシムヘシ

第百四十一條 自辨又ハ差入ヲ許シタル物ハ本人ニ交付セサルトキト雖携有物ノ例ニ依リ領置ノ手續ヲ爲スヘシ

前項ノ規定ハ飮食物ニ付テハ之ヲ適用セス

第百四十二條 沒入又ハ廢棄ノ處分ヲ爲シタルトキハ沒入廢棄簿ニ品目、數量竝處分ヲ爲シタル理由及年月日ヲ記載シ典獄之ニ證印スヘシ

第百四十三條 死亡者ノ遺留物ノ交付ヲ受クヘキ者遠地ニ在ルトキハ請求ニ因リ遺留物ヲ賣却シテ其ノ代金ヲ送付スルコトヲ得但シ遞送費ハ請求者ノ負擔トス

第十一章 賞罰

第百四十四條 賞遇ヲ爲スヘキ者ニハ賞表ヲ付與スヘシ

賞表ハ加ヘテ三箇ヲ超ユルコトヲ得ス

第百四十五條 賞表ハ曲尺長二寸幅一寸ノ白色ノ布ヲ用ヒ上衣ノ左袖肩臂間ノ表面ニ縫著セシムヘシ

第百四十六條 賞遇ハ左ノ如シ

一 第百十六條ニ定メタル接見ノ度數及第百二十三條ニ定メタル信書發受ノ度數ヲ一回宛增加スルコト

二 第六十七條ニ定メタル作業賞與金計算高ヲ賞表一箇每ニ十分ノ一宛增加スルコト

三 特別ノ糧食及飮料ヲ給與スルコト

第百四十七條 賞遇ヲ廢止シタル者ニハ賞表ヲ褫奪シ賞遇ヲ停止シタル者ニハ其ノ期間賞表ヲ除去スヘシ

第百四十八條 在監者左ノ各號ニ該當スル行爲アルトキハ五十錢以下ノ賞金ヲ給スルコトヲ得

一 在監者ノ逃走セムトスルヲ密告シタルトキ

二 人命ヲ救護シ又ハ在監者ノ逃走セムトスル者ヲ捕拿シタルトキ

三 天災事變又ハ傳染病流行ノ際監獄ノ用務ニ服シ功勞アリタルトキ

第百四十九條 減食ハ本人ニ給與スル糧食ノ一回ノ分量ヲ二分ノ一乃至三分ノ一ニ減ス

第百五十條 懲罰ノ言渡ハ典獄之ヲ爲スヘシ

第百五十一條 懲罰ハ言渡ノ後直ニ之ヲ執行スヘシ

減食又ハ屛禁ニ處シタル者ニ付テハ獄監醫員ヲシテ診斷セシメ其ノ健康ニ害ナシト認メタルトキニアラサレハ懲罰ヲ執行スルコトヲ得ス

第百五十二條 減食又ハ屛禁ノ執行中ニ在ル者ハ監獄醫員ヲシテ時時其ノ健康ヲ診斷セシムヘシ

第百五十三條 減食又ハ屛禁ノ執行中ニ在ル者ヲ法院ノ呼出ニ因リ出頭セシムルトキハ當日ニ限リ懲罰ノ執行ヲ停止スヘシ

前項ニ揭ケタル者ヲ移監ノ爲他所ニ護送スルトキハ護送ノ前日、當日及護送中懲罰ノ執行ヲ停止スヘシ

停止ノ日數ハ之ヲ處罰期間ニ算入セス

第百五十四條 減食又ハ屛禁ニ處シタル者ハ懲罰ノ執行ヲ終リタル後速ニ監獄醫員ヲシテ其ノ健康ヲ診斷セシムヘシ

第百五十五條 懲罰ニ處シ其ノ執行ヲ終ラサル者ノ移送ヲ受ケタルトキハ收監後三日以內ニ其ノ懲罰ノ執行ヲ開始スヘシ

第百五十六條 在監者護送ノ途中ニ於テ紀律ニ違ヒタルトキハ受領シタル監獄ニ於テ之ヲ懲罰ニ處スルコトヲ得

第百五十七條 在監者ノ賞罰ニ關スル事項ハ身分帳及懲罰簿ニ之ヲ記載スヘシ

第十二章 釋放

第百五十八條 刑期ノ終了ニ因リ釋放セラルヘキ受刑者ハ釋放前三日以內獨居拘禁ニ付シ典獄自ラ釋放後ノ心得ニ付諭告ヲ爲スヘシ

第百五十九條 刑期ノ終了ニ因リ釋放セラルヘキ受刑者ニ付テハ釋放後ノ保護ニ關スル事項ヲ調査スヘシ

第百六十條 釋放セラルヘキ者ニ付典獄ニ於テ必要アリト認メタルトキハ其ノ性格、行狀及保護ニ關スル意見ヲ本人居住地ノ廳、郡、支廳、市、街、庄又ハ警察官署又ハ本人ノ保護ヲ引受クヘキ者ニ通報スヘシ

第百六十一條 釋放セラルヘキ者疾病其ノ他ノ事故ニ因リ步行ニ差支アル場合ニ於テ相當ノ引取人ナキトキハ之ヲ監獄所在地ノ廳、支廳又ハ市、街、庄ニ引渡スヘシ

第百六十二條 釋放セラルヘキ者著衣ヲ有セサルトキハ豫メ本人ノ領置金若ハ作業賞與金又ハ其ノ他ノ方法ヲ以テ之ヲ調達セシメ若調達スル

コト能ハサルトキハ監獄ニ於テ之ヲ給與スヘシ

第百六十三條　假出獄ヲ許スヘキ者アリト認ムルトキハ典獄ハ判決書ノ謄本又ハ抄本及執行指揮書ノ謄本竝行狀錄及身上調査書類ヲ添ヘ臺灣總督ニ具申スヘシ

第百六十四條　假出獄ヲ許サレタル者ヲ釋放スルトキハ典獄ハ一定ノ式ニ依リ釋放ノ申渡ヲ爲シ且證票ヲ交付スヘシ

第百六十五條　假出獄ニ因リ釋放セラレタル者刑法第二十九條第一號乃至第三號ニ該當スルコトヲ知リタルトキハ典獄ハ速ニ意見ヲ具シ其ノ旨ヲ臺灣總督ニ申報スヘシ

第百六十六條　第百六十三條及第百六十四條ノ規定ハ刑法第三十條ニ依ル假出場ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十三章　死亡

第百六十七條　在監者死亡シタルトキハ典獄ハ其ノ死體ヲ檢視スヘシ病死ノ場合ニ於テハ監獄醫員ハ其ノ病名、病歷、死因及死亡ノ年月日時ヲ死亡帳ニ記載シ之ニ署名スヘシ

自殺其ノ他變死ノ場合ニ於テハ其ノ旨ヲ廳ニ通報シテ檢視ヲ受ケ檢視者及立會者ノ官氏名竝檢視ノ結果ヲ死亡帳ニ記載スヘシ

第百六十八條　死亡者ノ病名、死因及死亡ノ年月日時ハ速ニ之ヲ死亡者ノ家族又ハ親族ニ通報スヘシ死亡者刑事被告人ナルトキハ仍檢察官ニ通報スヘシ

第百六十九條　受刑者ノ死體ハ死亡後二十四時間ヲ經テ交付ヲ請フ者ナキ場合ニ限リ解剖ノ爲官公立ノ病院、學校又ハ其ノ他ノ公務所ニ之ヲ送付スルコトヲ得

死亡後二十四時間ヲ經テ交付ヲ請フ者ナキ場合ト雖其ノ後ニ至リ交付ヲ請フ者アリト思料スヘキトキ又ハ本人カ生前ニ於テ解剖ヲ肯セサル意思ヲ表示シタルトキハ前項ノ處分ヲ爲スコトヲ得ス

第百七十條　死體ヲ請求者ニ交付シ又ハ解剖ノ爲送付シタルトキハ其ノ旨ヲ死亡帳ニ記載スヘシ

第百七十一條　死亡後二十四時間ヲ經テ死體ノ交付ヲ請フ者ナキトキハ第百六十九條ノ場合ヲ除ク外之ヲ監獄ノ墓地ニ假葬スヘシ火葬ニ付シタル場合ニ於テハ其ノ遺骨ニ付亦同シ

假葬ノ場所ニハ死亡者ノ氏名及死亡ノ年月日ヲ記シタル木標ヲ立ツヘシ

第百七十二條　死體又ハ遺骨ヲ合葬シタルトキハ合葬者ノ氏名及死亡年月日ヲ合葬簿ニ記載シ合葬ノ場所ニ墓標ヲ立ツヘシ

墓標ニハ石ヲ用フヘシ

附　則

本令ハ臺灣監獄令施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス（明治四十一年十月一日ヨリ施行）

臺灣監獄則施行細則及明治三十二年二月府令第十號ハ之ヲ廢止ス【但シ懲治人ニ關スル規定ハ當分ノ內仍其ノ效力ヲ有ス】

【臺轄】

●監獄內傳染病豫防心得

明治三十年四月
臺灣總督府訓令第三十九號

【縣廳】【島廳】

監獄內傳染病豫防心得左ノ通相定ム但監獄ノ構造又ハ其他ノ不完全ナルニ依リ本心得各號中實行シ難キモノハ前以テ【民政局長】ヘ申報スヘシ

【臺轄】

監獄內傳染病豫防心得

此ノ心得ニ於テ傳染病ト稱スルハ明治二十九年律令第八號傳染病豫防規則第一條ノ八病ヲ云フ此心得執行ハ每年十一月一日ヨリ四月三十日マテノ間ニ於テ傳染病者ヲ發生セサル地方ニ於テハ便宜斟酌スルコトヲ得ト雖五月一日ヨリ十月三十一日マテハ一般ニ之ヲ嚴行スヘシ但第一號及第十二號ノ嚴行ハ傳染病發生地ニ限ル

一　每日一名以上ノ監獄醫ヲシテ晝夜署內ニ宿直セシムルコト

二　監獄醫ハ每日一回以上適宜ノ方法ヲ以テ各在監人ニ就キ身體ノ異同ヲ檢診スルコト

三　寢具ハ每三日一回以上終日日光ニ曝シ又ハ一週乃至二週每ニ熱汽消毒ヲ行フコト

四　被服ハ少クモ一週日每ニ洗濯シ又ハ熱汽消毒ヲ行フコト

五　飲食物ハ漬物、燒鹽、燒味噌類ヲ除クノ外煮沸シタルモノヲ給與スルコト

六　飲料水盥嗽水ハ煮沸シタルモノヲ與ヘ生水ヲ用ルコトヲ嚴禁スルコト又假令煮沸シタルモノト雖適當ノ制限ヲ定メ給與スルコト但工業ノ勞力又ハ習慣等ニ依リ特ニ分量及度數ヲ增サントスルトキハ醫師ノ意見ヲ聞クコト

七　飲料水ノ貯蓄器ハ日日汲干シ淸潔ニ掃除スルコト

八　飲食器具ハ熱湯或ハ冷却湯ヲ以テ洗滌スルコト

九　便器及汚穢物洗滌水ハ直ニ生石灰又ハ石灰乳ヲ以テ消毒スルコト

十　糞便ノ汲取ヲ頻繁ニシ每日一回以上糞池及其周圍ニ石灰乳若ハ生石灰ヲ撒布スルコト

十一　下水溝水溜塵芥溜等ハ時時掃除シ其跡ヘ石灰乳又ハ生石灰ヲ撒布スルコト

十二　下痢患者ニ注意シ萬一同患者アリタルトキハ隔離室ヲ設ケテ一切之ヲ隔離シ其便器ハ各別ニ當テ備フルカ若ハ須用ノ時ニ差入レ醫師ニ於テハ糞尿ノ檢査ヲ行フコト

十三　吏員ノ內豫防消毒ニ通スルモノヲ選擇シ時宜ニヨリ之ヲ練習セシメタル上該事務ニ從ハシムルコト

十四　傳染病ニ罹ル者アルトキハ監獄所屬ノ避病舍ニ入レ其疑似症ニ罹ル者ハ他ノ在監人ト隔離スルコト

十五　監房內ヨリ傳染病患者發生シタルトキハ其監房ノ在監者ニハ入浴セシメタル上淸潔ナル衣服ヲ貸與シ之ヲ他ノ監房ニ移シ一週日以上他ノ者ト隔離スルコト但隣房ノ在留者モ入浴セシメタル上之ニ淸潔ナル衣服ヲ貸與スルコト

十六　工場ニ於テ傳染病患者發生シタルトキハ其附近ハ五日間使用ヲ中止シ嚴重ナル消毒掃除ヲ爲スコト

十七　前項ノ場合ニ於テ患者ニ觸接若ハ近接シタル者ハ直ニ入浴セシメタル上淸潔ナル衣服ヲ貸與シ一週日以上他ノ者ト隔離セシメ其他ノ同場者ハ直ニ入浴セシメ且ツ著衣ニ十分ノ消毒ヲ施シタル上適宜ノ處分ヲ爲スコト

十八　傳染病患者其他隔離セシムヘキモノノ被服臥具及患者ニ觸接若ハ近接シタル者ノ被服ハ總テ熱汽消毒ヲ行フコト

十九　患者發生ノ監房竝ニ其隣房及工場其他ニ於テ發生シタル患者ノ

監房ハ石炭酸水ヲ以テ拭淨シ發生ノ監房ハ一週日以上使用ヲ停止シ其間牖戶ヲ開放シテ空氣ヲ通スルコト

二十　患者若ハ病毒ニ接近スル者ニハ一定ノ被服ヲ著用セシメ其事務ヲ終ヘタルトキハ身體及被服ニ消毒ヲ行フコト

二十一　患者ヲ乘セタル昇轝其他患者ニ接近シタル器物ハ明治二十九年訓令第七十三號傳染病豫防心得ニ據リ消毒ヲ行フコト

二十二　避病舍詰看守及看病者ハ身體最モ強壯ナル者ヲ以テ專任シ但擔當以外ノ場所ヘ可成出入ヲ避ケシムルコト

二十三　差入買入ノ食物ハ確實ナル受負人ヲ定メ料品及調理方法ヲ指定シ監獄署ニ於テ嚴重監督ヲナスコト

二十四　衣類其他ノ差入物ハ【明治二十九年訓令第七十三號傳染病豫防心得】ニ依リ適宜ノ消毒法ヲ行フコト

二十五　監外ヨリ輸入スル工場品其ノ他物品ハ適宜ノ消毒ヲ行フコト

二十六　監外ヨリ監內ニ入ル者ハ總テ門衞所ニ於テ相當ノ檢疫ヲナスコト

二十七　吏員以下ノ家族同居人又ハ其隣接ノ家ニ於テ傳染病患者ヲ生シタルトキハ五日以上出勤ヲ差止ムルコト

二十八　受付其他ニ於テ外人ト頻繁接近スル者ハ時時消毒ヲ行フコト

二十九　近隣傳染病患者アリシ邸宅及傳染病患者ノ多數ナル土地ヘハ外役セシメサルコト

三十　新ニ入監スル者ハ監獄醫ヲシテ診察セシメタル後湯及石鹼ヲ以テ頭髮ヲ洗ハシメ且ツ直ニ入浴セシメ清潔ナル衣袴ヲ貸與スルコト

三十一　刑事被告人及携帶乳兒ノ衣服ハ直ニ熱汽消毒ヲ行ヒタル後之ヲ返付使用セシムルコト

三十二　入監者ノ携有物品ハ可成速ニ熱汽消毒ヲ行ヒタル後領置スルコト

三十三　熱汽消毒ハ消毒スヘキ物品ヲ消毒器中ニ入レ成ルヘク熱汽ノ內部ニ透徹シ易キ樣適宜ニ排列シ通常衣服ノ類ニ於テハ三十分時間以上臥具ノ類ニ於テハ一時間以上攝氏百度以上ノ熱汽ヲ周ク通スヘキコト

三十四　滿期其ノ他ニヨリ出獄スル者ハ出監ノ際監獄醫ヲシテ診察セシメ傳染病者ハ總テ其ノ他ノ警察官署ニ引渡スコト

●體刑囚人處遇規則

明治三十七年六月二十二日
臺灣總督府令第五十五號

體刑囚人處遇規則左ノ通相定ム

體刑囚人處遇規則

第一條　體刑囚人ニ關スル處遇ハ此ノ規則ニ定ムルモノヲ除クノ外【臺灣監獄則】及【同施行細則】ノ規程ヲ準用ス

第二條　體刑囚人刑ノ執行ヲ終リタルトキハ直ニ之ヲ釋放スヘシ

第三條　體刑囚人ハ自由刑囚人ト其ノ監房ヲ區別スヘシ

第四條　刑ノ執行ヲ猶豫シタル體刑囚人ニシテ作業ヲ爲サント請フ者アルトキハ監房內ニ於テ坐作ノ業ヲ許スコトヲ得但シ工錢ヲ給スルノ限ニアラス

第五條　體刑囚人ノ衣類臥具ハ總テ自辨トシ其ノ種類品數等ハ監獄長之ヲ指定ス但シ汚損其ノ他衛生上ニ害アリト認ムルトキ又ハ自辨スルコト能ハサル者ニハ之ヲ貸與スヘシ

前項ニ依リ貸與スル衣類ハ赭色トス

第六條　體刑囚人ニシテ糧食ノ自辨ヲ請フ者アルトキハ之ヲ許スヘシ

第七條　體刑囚人ニハ其ノ親屬故舊ヨリ書類書籍用紙衣服臥具其ノ他必要ノ物品又ハ飲食物ノ差入ヲ請フ者アルトキハ之ヲ許スヘシ

新聞紙及時事ノ論說ヲ記スルモノ其ノ他檢束上差支アリト認ムルモノハ前項ノ限ニ在ラス

第八條　刑ノ執行ヲ猶豫シタル體刑囚人獄則ヲ犯シタルトキハ其ノ輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處斷スルコトヲ得但シ刑ノ執行ニ著手スルトキハ其ノ一日前ニ於テ之ヲ停止スヘシ

減食　一週日以內
一回ノ糧食ヲ二分ノ一乃至三分ノ一ニ減ス

●臺灣總督府刑務所作業規程

明治三十六年三月
臺灣總督府訓令第五十三號

改正　大正八年訓令第一一九號、一二年府令第八七號、一五年訓令第四號

臺灣總督府刑務所作業規程左ノ通相定ム

刑務所

臺灣總督府刑務所作業規程

第一條　刑務所作業ノ種類ハ規律及健康ヲ害スルコトナク且生產的ノモノヲ選ムヲ要ス

第二條　作業新設ノ認可ヲ申請セントスルトキハ其ノ種類、種目、施行方法、人員、科程、工錢竝工場、器具器械ノ設備等ニ付意見ヲ詳悉スルヲ要ス

既設ノ作業ヲ廢止シタルトキハ其ノ都度臺灣總督ニ報告スヘシ

第三條　作業、種目、科程又ハ料定工錢ヲ變更シタルトキハ其ノ都度臺灣總督ニ報告スヘシ

第四條　科程ハ其ノ地方ノ情況ニ依リ普通一人ノ働高ヲ以テ之ヲ定メ老者、十八歲未滿ノ受刑者、病弱者及不具者ニ對シテハ相當ノ定量ヲ指定スルモノトス

第五條　作業ニ關スル物品擔當者ハ作業係主任ヲ以テ之ニ充ツ

第六條　作業係主任ハ每日一回以上各工場ヲ巡視スヘシ

第七條　工場ニ二人以上ノ看守又ハ女監取締ヲ配置スル場合ニ於テハ其ノ內ノ一人ヲ以テ作業擔當者タラシムヘシ

第八條　各工場ニハ科程及料定工錢表ヲ揭出スヘシ

第九條　作業ノ成績ハ每日監守又ハ女監取締之ヲ日課表ニ記入シ全月ノ記入ヲ了ヘタルトキハ翌月三日迄ニ作業係主任ニ提出スヘシ

作業日課表ハ第一號書式ニ依ル

第十條　作業係主任前條ノ日課表ヲ受ケタルトキハ其ノ月八日以內ニ之ヲ整理スヘシ

第十一條　削除

第十二條　削除

第十三條　作業係主任ハ前月分ノ作業賞與金計算高明細書ヲ每月十日以

内ニ刑務所長又ハ支所長ニ提出スヘシ

第十四條　刑務所ノ營繕工事又ハ刑務所需用ノ物品製作及人夫ノ雇傭ハ可成收容者ノ勞力ヲ使用スヘシ

第十五條　收容者ノ使役ニ關シテハ受負人又ハ依託者ヲシテ干與セシムルコトヲ得ス

第十六條　官ニ屬スル器具器械素品製品ハ受負人又ハ依託者ニ屬スルモノト嚴重ニ區別シテ整理スヘシ

第十七條　作業ニ要スル物品ハ鎖鑰アル倉庫又ハ物置ニ收藏スヘシ但シ特別ノ事情アルモノハ此ノ限ニ在ラス

第十八條　受負人又ハ依託者ニ屬スル器具器械素品及製品ノ保管出納ニ就テハ相當ノ取締法ヲ設クヘシ

第十九條　作業ニ使用スル器具器械ハ一定ノ簿册ニ記載シ每日罷役時ニ於テ看守又ハ女監取締其ノ品目數量形狀等ヲ嚴密ニ點檢スヘシ

第二十條　物品ノ製作、修繕又ハ收容者ノ傭役ハ刑務所長又ハ支所長ノ命令アルニアラサレハ之ニ著手スルヲ得ス

第二十一條　物品ノ製作、修繕又ハ收容者ノ傭役ハ作業係主任ニ於テ刑務所長又ハ支所長ノ法定ヲ經テ製作命令書若ハ傭役命令書ヲ看守又ハ女監取締ニ交付スヘシ但シ刑務所傭夫ニ付テハ之ヲ省略スルコトヲ得

製作命令書ハ第二號書式ニ傭役命令書ハ第十二號書式ニ依ル

第二十二條　就業者又ハ就業者ニ對シ直接ニ製作ヲ指示スヘキ者ニハ依託者ノ何人タルコトヲ知ラシムルコトヲ得ス

第二十三條　製作品又ハ修繕品成工シ若ハ傭役工錢ノ計算期日ニ至リタルトキハ作業係主任ニ於テ成工報告書又ハ傭役報告書ヲ作リ刑務所長又ハ支所長ノ決定ヲ經テ製作品ハ物品會計官吏ニ修繕品及依託品ハ其ノ注文者ニ引渡スヘシ

成工報告書ハ第三號書式ニ傭役報告書ハ第十三號書式ニ依ル

第二十四條　二回以上ノ複生產ヲ經テ成工スル製作品ハ其ノ都度前條ノ手續ヲ爲スヘシ

第二十五條　依託品成工シタルトキ作業係主任ハ依託者ニ通知シ速ニ代金納付ノ上現品ヲ引取ラシムヘシ

第二十六條　製作品ハ素品代及工錢ヲ以テ其ノ原價トシ左ノ各項ニ依リ賣却スヘシ

一　刑務所需用ノ物品ハ原價ヲ以テスヘシ

二　他ニ賣却スルモノハ市價ヲ標準トシ相當價額ヲ定ムヘシ

第二十七條　作業係主任ハ製作上遺殘ノ素品ハ努テ他ニ之ヲ利用スルノ道ヲ講スルコトヲ要ス

素品ノ切屑鋸屑鉋屑等ノ類ニシテ利用ノ途ナシト認ムルモノハ取纏メ少クモ每月一回其ノ品目數量ヲ記載シ刑務所長又ハ支所長ニ報告スヘシ

第二十八條　作業係主任ハ第四號第五號書式及第七號乃至第九號書式ノ帳簿及諸表ヲ作業物品ノ會計官吏ハ第十號書式及第十一號書式ノ帳簿ヲ備フヘシ

一工場器具器械臺帳　第四號書式
一傭役工錢原簿　第五號書式
一工場素品受拂簿　第七號書式
一作業素品精算報告書　第七號ノ二書式
一作業日表　第八號書式
一作業月報　第九號書式
一作業素品出納簿　第十號書式
一製作品出納簿　第十一號書式

傭役工錢原簿、作業素品出納簿及製作品出納簿ハ月計及累計ヲ爲スヘシ

第二十九條　作業係主任ハ第六號書式ニ依リ每月十日迄ニ前月分ノ工錢報告書ヲ刑務所長又ハ支所長ニ提出スヘシ

雇傭ノ事實止ミタルトキハ其ノ都度前項ノ手續ヲ爲スヘシ

第三十條　受負業ハ一人ニ對シ數箇ノ業ヲ受負ハシメ若ハ同一作業ヲ二人以上ニ受負ハシムルコトハ可成之ヲ避クルヲ要ス

第三十一條　受負人ハ身元確實ニシテ工錢二箇月以上ノ保證金ヲ提出スル者又ハ身元確實ナル二人以上ノ保證人ヲ立ツル者ナルコトヲ要ス

第三十二條　受負契約ハ左ノ事項ヲ具備スルヲ要ス

一　作業ノ種類

二　傭役人員竝其ノ增減方法

三　工錢ノ算出竝其ノ增減方法

四　受負期限竝其ノ解除方法

五　工場器具器械素品授業手等ノ設備及負擔區分

六　素品及製品受渡ノ方法

七　受負人ノ事故ニ依リ休役セシメタルトキノ處分方法

八　受負人ニ屬スル物品ノ毀損滅失等ニ對シテハ監署ハ賠償ノ責ニ任セサルコト

九　受負人ハ刑務所ニ關スル法令ヲ遵奉シ官吏ノ指揮命令ヲ受クルコト

十　工錢ノ納期ハ前月分ヲ翌月十五日以內ニ定ムルコト

十一　工錢ノ納付其ノ他ノ義務ヲ怠リタルトキノ處分方法

本令ハ明治三十六年四月一日ヨリ施行ス但シ現ニ受負契約期限中ニ係リ本令ニ依リ難キモノハ該契約滿期ノ日迄之ニ依ラサルコトヲ得

第一號書式（用紙美濃半截）

年　月　日
計
生産高又ハ人工
考

〔臺灣〕

刑名刑期		稱呼番號氏名	
釋放日	大正　　年　　月　　日	就業日	大正 （明治）

生産高又ハ人工	摘要	月

業種	成績	工錢
		圓
計		

就業延人員		
不就業延人員		
作業賞與金計算基礎	行狀	
	性向	
	作業種類	
	作業成績	
	科程了否	
	計算級別	
作業賞與金計算高		圓
備考		

〔臺灣〕

月中日課表　大正　　年

入所日	大正 （明治）　　年　　月　　日		
日	業種	科程	工錢
1			圓
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			
16			
17			
18			
19			
20			
21			
22			
23			
24			
25			
26			
27			
28			
29			
30			
31			

備考

一　作業賞與金ノ計算ヲ爲サヽル間ノ日課表ハ黑色刷ヲ用ヰ計算ヲ爲ス間ノ日課表ハ赤色刷ヲ用フヘシ

二　免業、疾病、懲罰其ノ他ノ事故ニ依リ就業セサルトキハ摘要欄ニ其ノ旨ヲ記入スヘシ就業一日ニ滿タサル場合ト雖仍ホ其ノ時間ヲ記入スヘシ

三　臺灣監獄令施行規則第六十八條ニ依リ作業賞與金計算高ヲ增加スル場合ニ於テハ其ノ旨ヲ摘要欄ニ記入スヘシ

四　業種、科程及工錢欄ハ最初又ハ變更ノ際ノミ記入スヘシ

五　月計欄ノ工錢ハ其ノ成績ニ依リ記入スヘシ

第二號書式　（用紙半紙）

製作命令書甲

大正年月日回議	注文番號　第　號	成工期日　年月日	指定工場
刑務所長	物品會計官吏	作業係主任	
左記ノ物品製作（又ハ修繕）委託ニ付製作命令相成可然哉			
品目	數量	單價	豫定價
右ノ物品製作（又ハ修繕）相成度（素品左ノ通提供）候也			
大正　年　月　日	住所 委託人　氏　名㊞		
提供素品			

製作命令書乙

注文月日　年月日	注文番號　第　號	成工期日　年月日	指定工場
左記ノ物品　方命令アリ	大正　年　月　日	作業係主任	
品目	數量	豫定價格	
仕樣概略			
提供素品			

備考

一　本書ハ二枚續トシ注文アル場合ニ注文人ヲシテ甲ノ部品目數量（提供ノ素品アルモノハ其ノ品目數量）及乙ノ部仕樣ノ概略（細密ナルモノハ別仕樣書若クハ圖面ヲ添附セシム）ヲ記入セシメ作業係主任ハ豫定價格ヲ記シ決判ヲ經タル上切斷シテ乙ノ部ヲ指定工場ノ擔當者ニ交付スヘシ但注文者ニ於テ價格ノ豫定ヲ要セサルトキハ之ヲ省略スルモ妨ケナシ

【臺轄】

二　仕入製品及農作物注文ノ場合ニモ亦本書式ヲ準用ス但農作物ハ概定數量ヲ以テ注文ヲ受クルコトヲ得

第三號書式　（用紙半紙）

成工報告書

大正年月日回議	注文月日　年月日	注文番號　第　號	成工期日　年月日
刑務所長	物品會計官吏	作業係主任	工場擔當
左記ノ物品成工候ニ付報告候也			
品目	數量	單價	價格
提供素品殘餘	損益計算　金　損益	注文者　住所 依託人　氏　名	
名稱	數量	單價	金額
所要ノ素品			
用人工			
計			

備考

一　製作命令アリタル物品成工シタルトキハ工場擔當ノ看守又ハ女監取締ニ於テ其ノ品目數量、注文月日、注文番號、成工月日及製作ニ要シタル素品人工（提供素品ノ殘餘アリタルトキハ其ノ品目數量）ヲ記シ製作命令書ト共ニ現品ヲ添ヘ作業係主任ニ提出セシムヘシ作業係主任ハ價格ヲ算定シ損益計算及注文者ノ氏名ヲ記シ回議ニ付スヘシ

二　委託品若ハ農作物ノ一部ヲ內渡スル場合ニハ適宜帳簿ヲ以テ整理シ全部成工若クハ收穫シタルトキニ本書ヲ調製スヘシ

三　耕作物ノ決定セサル以前ニ於テ地拵等ノ爲出役ヲ要スル場合ハ耕區ヲ限リ假ニ製作命令書ヲ發スヘシ其ノ植付作物ノ決定シタルトキハ假ノ製作命令書ヲ更正スヘシ

【臺轄】

第四號書式　工場器具器械臺帳　（用紙適宜）

品目

年月日	摘要	番號	受	拂	殘	顛末

備考　本簿ハ工場每ニ別冊トシ物品擔當者ヨリ受取リタル器具器械ノ受拂ヲ記載スルモノトス

第五號書式

傭役工錢原簿

年月日	摘要	受			（朱）損益	計	摘	殘	備考
		延人員	工錢額	素品代			價額		
		人	圓	圓	圓	圓	圓	圓	

第六號書式 (用紙半紙)

傭工錢報告書

年月日回議	刑務所長 作業係主任 扱者
命令 大正 年 月 日	
命令 第 號	
計算期 月 日	

傭工錢精算左記ノ通リニ付報告候也

金額	損益
金	金 原價 金 益金 金 損失

納人住所氏名

内譯

業名	等級及人工	單價	金額	備考

第七號書式 工場素品受拂簿 (用紙適宜)

品目	單位呼稱

年月日 月	年月日 日	摘要	受	拂	殘

【[illegible]】

備考

一 本簿ハ精算擔當毎ニ別冊トシ物品會計官吏ヨリ交付ヲ受ケタル素品ノ受拂ヲ記載スルモノトス

二 口座ハ作業素品出納簿ニ準シ之ヲ設クヘシ

第七號ノ二書式 (用紙適宜)

所長 物品會計官吏 作業係主任 精算擔當

第 號 大正 年 月 日報告

大正 年 月分作業素品精算報告書

品目	摘要	單位ノ稱	受入高 前月ヨリ越高	受入高 本月受入高	受入高 計	本月拂出高	殘高

備考

一 本報告書ハ工場素品受拂簿ニ依リ精算擔當毎ニ毎月三日迄ニ其ノ前月分ヲ作成シ作業係主任ニ提出シ作業係主任ハ之カ正否ヲ檢査シタル上囘議ニ附スヘシ

第八號書式 刑務所長 作業係主任 (用紙美濃紙)

作業日表 年 月 日 (何)刑務所

【[illegible]】

作業	種類 種目	就業者 官司業 何々 何何何何 々々	就業者 官司業 何々 何何何何	就業者 官司業 何々 何何何何	就業者 官司業 小計	就業者 官司業 刑務所營繕夫 何何何 々 計	就業者 官司業 刑務所傭夫 何何何何 々 計	就業者 官司業 小計	就業者 受負業	就業者 受負業 小計	就業者 合計	不就業者	不就業者 合計
定役者	男												
	女												
留置者	男												
	女												
無定役者	男												
	女												
刑事被告人	男												
	女												
計	男												
	女												

備考

一 本表ハ毎朝出役時ノ人員ヲ記載スルモノトス

二 分房内ニ於テ作業ニ從事スルモノアルトキハ之ヲ朱書スヘシ

三 刑務所需用ノ作業ニシテ營繕夫ヲ除クノ外工錢ヲ收支セサルモノハ總テ刑務所傭夫トシテ整理スヘシ

第九號書式 刑務所長 作業係主任 (用紙美濃紙)

作業月表 年 月 日 (何)刑務所

作業	種類		何々
	種目		何々 何々
就役延人員	定役者	男	
		女	
	留置者	男	
		女	
	無定役者	男	
		女	
	刑事被告人	男	
		女	
	計	男	
		女	
工錢	總額		
	一人一日平均		
作業賞與金計算高	總額		
	一人一日平均		
作業賞與金不計算延人員			

小計	合計	前月合計	比較增、減（朱）
	（此ノ間第八號書式ノ通ニ付略）		

備考

一　人員ノ端數ハ人以下分ニ止メ又一日一人平均額ハ厘以下毛糸マテニ止ムルモノトス

二　刑務所需用ノ作業ニシテ營繕夫ヲ除ク外工錢ヲ收支セサルモノハ總テ刑務所傭夫トシテ整理スヘシ

第十號書式　作業素品出納簿

在				備考
假出		計		
數量	金額	數量	金額	
	圓 錢 厘		圓 錢 厘	

【臺灣】

入				拂出						現	
受入		計		假出		假出ノ內生產		殘		在庫	
數量	金額	數量	金額	數量	金額	數量	金額	數量	金額	數量	金額
	圓 錢 厘		圓 錢 厘		圓 錢 厘		圓 錢 厘		圓 錢 厘		圓 錢 厘

【臺灣】

年月日	摘要	單價	受	
			越高	
			數量	金額
日				圓 錢 厘

備考

一　品種類似ノモノハ成ルヘク同一口座ニ之ヲ收メ購入單價ヲ異ニスルモノハ毎月一日ノ現在高ニ依リ平均單價ヲ算出シ備考欄ニ揭記スヘシ

二　平均單價ニ異動アリタルトキハ物品會計官吏ハ之ヲ作業係主任ニ通知スヘシ

三　拂出數量ハ作業素品精算報告書ニ依リ拂出金額ハ平均單價ニ依リ算出スヘシ

第十一號書式　製作品出納簿

備考

量	入				（朱）損益	拂出			現在	
計	延人員	工錢額	素品代	元價		數量	單價	金額	數量	金額
	分	圓 錢 厘	圓 錢 厘	圓 錢 厘	圓 錢 厘		圓 錢 厘	圓 錢 厘		圓 錢 厘

受數 生産	受數 高越	記號	摘要	年月日
				日

第十二號書式　（用紙半紙）

傭役命令書　甲

回議	年　月　日
命令	第　號
計算期日	月　日
指定工場	

刑務所長

作業係主任

左記ノ通傭役命令相成可然哉

業種	豫定人員	使役ノ目的	備考

〔臺轄〕

傭役命令書　乙

依託人

命令	大正　年　月　日
命令	第　號
計算期日	月　日
指定工場	

左記ノ通傭役命令アリタリ

作業係主任

業種	豫定人員	使役ノ目的

備考

第十三號書式　傭役報告書　（用紙半紙）

命令	大正　年　月　日第　號
擔當	

月日	等級及人工			
計				
備考				
擔當者印				

小計	
合計	

備考

一　本表ハ作業擔當看守又ハ女監取締之ヲ保管シ毎日出役人工ヲ記入スヘシ

二　作業種目細目又ハ工錢率ノ異リタルモノハ別表ニ記入スヘシ

三　就業時間ニ變更アリタルトキハ人工ノ小計ヲ爲スヘシ

四　就業人工ハ便宜時間ヲ以テ記入スルコトヲ得

五　本表ハ傭工錢報告書ニ添附スルモノトス

六　農作物ニ限リ特ニ本表ヲ用ヰ成工報告書ニ之ヲ添附スヘシ

七　農作物ノ内渡シヲ爲シタルトキハ備考欄ニ記入スヘシ

八　地拵等ノ爲假製作命令書ニ依リ使役シタル人工ハ後ノ耕作物ノ計算ニ併加スヘシ

〔臺轄〕

●臺灣監獄令施行規則ニ依ル在監者ノ作業時間

大正十一年六月十四日
臺灣總督府訓令第百二十七號

監獄

臺灣監獄令施行規則第五十五條第一項ニ依リ在監者ノ作業時間別表ノ通相定ム

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

（別表）

月次／作業時間	平日（平均一日ニ付）	日曜日（一月ニ付）
一月	九時間	十八時間
二月	九時間	十八時間
三月	九時三十分間	十九時間
四月	十時間	二十時間
五月	十時三十分間	十時三十分間
六月	十一時間	十一時間
七月	十一時間	十一時間
八月	十時三十分間	十時三十分間
九月	十時間	十時間
十月	九時三十分間	十九時間
十一月	九時間	十八時間
十二月	九時間	十八時間

●在監人行狀勘査及賞譽規程

明治三十六年三月
臺灣總督府訓令第三十六號

改正　大正八年訓令第一二二號、一二年府令第八七號

刑務所

明治三十一年十一月訓令第三百七號在監人行狀勘査及賞譽規程左ノ通改正ス

在監人行狀勘査及賞譽規程

第一條　賞譽ハ獄則ヲ謹守シ作業ニ勉勵シ且眞心改悛ノ狀顯ハレ他囚ノ龜鑑ト爲ルヘキ行爲アル者ニ對シ第二條規定ノ期間經過後一囘ツツ之

ヲ行ヒ賞表三箇ニ至リテ止ム

第二條　囚人ハ入監後二箇年ヲ經過スルニアラサレハ賞譽スルコトヲ得ス

各賞譽ノ期間ハ二箇年トス

囚人ニシテ特ニ情狀憫諒スヘキモノアルトキハ前二項ノ期間ヲ短縮スルコトヲ得

第三條　賞表ヲ褫奪シタルトキハ其ノ褫奪シタル日ヨリ二箇年ヲ經過スルニアラサレハ再賞譽スルコトヲ得ス但シ改悛ノ狀最顯著ナル者ハ其ノ期間ヲ一箇年迄短縮スルコトヲ得

第四條　囚人ノ行狀ハ概ネ左ノ事項ニ依リ看守又ハ女監取締ヲシテ視察セシメ少クモ一箇月ニ一回細大洩サス之ヲ典獄補若ハ看守長ニ報告セシムヘシ

一　獄則及紀律ノ遵否ニ關スル事項
二　親屬及故舊ニ對スル思念ニ關スル事項
三　教誨及教育ニ關スル事項
四　作業及工錢ニ關スル事項
五　衞生淸潔ニ關スル事項

典獄補若ハ看守長ハ看守又ハ女監取締ノ提出シタル報告ヲ參酌シ自己ノ意見ヲ定メ少クモ二箇月ニ一回身分帳行狀錄ニ記入シ刑務所長又ハ支所長ニ提出スヘシ

第五條　刑務所長又ハ支所長ハ刑期六箇月以下ノ者ニ對シテハ出監前ニ、刑期六箇月以上ノ者ニ對シテハ六箇月毎ニ身分帳行狀錄ニ依リ行狀ノ審査ヲ爲シ其ノ良否ヲ判定スヘシ

〔臺轄〕

第五條ノ二　各賞與期ニ於テ賞與ヲ行ハントスルトキハ刑務所長又ハ支所長ハ前條ノ判定ニ基キ之ヲ決定スヘシ

第六條　削除

第七條　刑事被告人ノ行狀ハ適宜ノ方法ヲ設ケテ之ヲ勘査スヘシ

●在監人死者解剖ノ件

明治三十二年十二月
臺灣總督府訓令第三百五十號

【臺北縣】　醫學校

在監人病死者及刑死者ニシテ其遺骸ノ下付ヲ請フヘキ親屬故舊ノアラサルトキ若ハ親屬ノ承諾アリタルトキハ之ヲ醫學校ニ交付シ解剖實驗ノ用ニ供スルコトヲ得但醫學校ニ於テ剖觀ノ後ハ之ヲ縫理シテ原體ニ復スヘシ

●臺灣假出獄取締細則

明治四十一年九月十六日
臺灣總督府令第五十四號

改正　大正九年府令第六五號、一二年第八七號

臺灣假出獄取締細則左ノ通相定ム

臺灣假出獄取締細則

第一條　假出獄ヲ許サレタル者ハ住居ノ地ヲ管轄スル廳、郡、支廳又ハ警察官署ノ監督ヲ受ク

第二條　假出獄ヲ許サレタル者ヲ釋放スルトキハ刑務所ハ住居ノ地ニ到著スヘキ日ヲ定メ之ヲ證票ニ記載スヘシ

假出獄ヲ許サレタル者ハ前項ニ依リ證票ニ記載セラレタル日ニ監督官署ニ出頭シ證票ニ認印ヲ受クヘシ

第三條　假出獄ヲ許サレタル者天災、疾病其ノ他ノ事故ニ因リ前條ノ規定ニ從フコト能ハサルトキ又ハ其ノ虞アルトキハ遲滯ナク其ノ事由ヲ廳、郡、支廳又ハ警察官署ニ申出テ證明ヲ受クヘシ

第四條　假出獄ヲ許サレタル者アルトキハ刑務所長ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル法院ノ檢察官及監督官署ニ通報スヘシ

前項ノ通報ヲ受ケタル檢察官、監督官署ハ假出獄者名簿ヲ調製シ其ノ者ノ假出獄中ニ於ケル一切ノ關係事項ヲ記入スヘシ

第五條　假出獄ヲ許サレタル者三日以上十日未滿ノ旅行ヲ爲サムトスルトキハ監督官署ニ其ノ事由、行先地及旅行日數ヲ屆出ヘシ

第六條　假出獄ヲ許サレタル者住居ヲ轉移シ又ハ十日以上ノ旅行ヲ爲サムトスルトキハ其ノ事由、行先地及旅行日數ヲ記載シタル書面ヲ提出シテ監督官署ノ許可ヲ請フヘシ

旅行ヲ許可シタルトキハ監督官署ハ旅券ヲ交付スヘシ此ノ場合ニハ第二條及第三條ノ規定ヲ準用ス

第七條　住居ノ轉移ヲ許可シタルトキハ監督官署ハ其ノ旨ヲ第四條ノ刑務所長、檢察官竝轉移地ヲ管轄スル廳、郡、支廳又ハ警察官署ニ通報スヘシ

前項ノ場合ニハ關係書類ヲ新監督官署ニ送付スヘシ

第八條　假出獄ヲ許サレタル者帝國外ニ旅行ヲ爲サムトスルトキハ監督官署及證票ヲ交付シタル刑務所ヲ經由シテ臺灣總督ノ許可ヲ請フヘシ

監督官署及刑務所ハ事實ヲ調査シ意見ヲ付スヘシ

第六條ノ規定ハ旅行ヲ許可セラレタル場合ニ之ヲ準用ス

〔臺轄〕

第九條　帝國外ノ旅行ヲ許可セラレタル者アルトキハ監督官署ハ其ノ旨ヲ第四條ノ檢察官ニ通報スヘシ

第十條　旅行ヲ許サレタル者住居ノ地ニ歸著シタルトキハ遲滯ナク監督官署ニ出頭シ旅券ヲ還納スヘシ

第十一條　假出獄ヲ許サレタル者ハ遲滯ナク監督官署ニ職業其ノ他生計ニ關スル見込ヲ立テ之ヲ屆出ヘシ若シ保護引受人アルトキハ之ニ連署スヘシ

第十二條　假出獄ヲ許サレタル者ハ毎月一回監督官署ニ出頭シテ前條ノ事項ニ付其ノ結果ヲ申述スヘシ

旅行ヲ許可セラレタル者同一ノ場所ニ一月以上滯在スルトキハ滯在地ヲ管轄スル廳、郡、支廳又ハ警察官署ニ出頭シテ前項ノ申述ヲ爲スヘシ此ノ場合ニ於テハ其ノ官署ハ監督官署ニ申述ノ要旨ヲ通報スヘシ

第十三條　監督官署ハ假出獄ヲ許サレタル者ヲシテ正業ニ就キ善行ヲ保タシムル爲必要ナル訓示ヲ爲シ又ハ之カ爲必要ナル行爲ヲ命スルコトヲ得

第十四條　監督官署ハ六月毎ニ假出獄ヲ許サレタル者ノ行狀ノ良否、職業ノ種別及勉否、生活ノ狀況、親族トノ關係其ノ他ノ事項ニ付調査書ヲ作リ之ヲ證票ヲ交付シタル刑務所ニ通報スヘシ

第十五條　假出獄ヲ許サレタル者ノ監督ハ證票ヲ交付シタル刑務所長ノ意見ヲ聽キ【街庄長】出獄人保護事業ニ從事スル者其ノ他適當ナル者ニ委任スルコトヲ得

前項ニ依リ委任ヲ受ケタル者ハ毎月末日第十四條ニ揭ケタル事項ヲ監督官署ニ通報スヘシ

第十六條　檢察官廳、郡、支廳又ハ警察官署ハ假出獄ヲ許サレタル者刑法第二十九條第一項ニ該ルコトヲ知リタルトキハ意見ヲ具シ臺灣總督ニ申報スヘシ

廳、郡、支廳又ハ警察官署ノ爲ス申報ハ住居ノ地ヲ管轄スル法院ノ檢察官ヲ經由スヘシ

第十七條　臺灣總督ニ於テ假出獄ノ處分ヲ取消シタルトキハ假出獄ヲ許サレタル者ノ所在地又ハ住居ノ地ヲ管轄スル法院ノ檢察官又ハ其ノ在監スル刑務所ニ通報シテ其ノ執行ヲ爲サシム

前項ノ場合ニ於テハ證票ヲ還納セシム

第十八條　假出獄ノ處分ヲ取消サレタル者在監者ニアラサルトキハ檢察官ハ刑事訴訟法第三百十九條第三項ニ依リ逮捕狀ヲ發スヘシ

第十九條　第十七條ノ執行ヲ爲シタル檢察官又ハ刑務所ハ其ノ旨ヲ第四條ノ檢察官、監督官署及證票ヲ交付シタル刑務所ニ通報スヘシ

第二十條　假出獄ヲ許サレタル者死亡シタルトキハ監督官署ハ之ヲ第四條ノ檢察官及證票ヲ交付シタル刑務所ニ通報スヘシ

前項ノ通報ヲ受ケタル刑務所ハ其ノ旨ヲ臺灣總督ニ申報スヘシ

第二十一條　帝國內ト雖本島外ノ住居轉移及旅行ニ關シテハ當分ノ內第八條乃至第十條ノ規定ヲ準用ス

附則

本令ハ明治四十一年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際現ニ假出獄中ノ者ニモ仍本令ヲ適用ス

●受刑者假出獄證票書式

明治四十一年九月
臺灣總督府訓令第百五十八號

改正　大正三年訓令第一九七號、九年第一五九號、一二年府令第八七號　**刑務所**

受刑者假出獄證票書式左ノ通相定ム

本令ハ明治四十一年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十八年十二月訓令第二百五十三號ハ之ヲ廢止ス

（書式）

（表　面）

假出獄證票

罪質、刑名刑期
明治何年何月何日何法院宣告
明治何年何月何日刑期起算
明治何年何月何日滿期

本籍地
住居地
戸主又ハ誰何男、女、兄、弟、妻、何々
氏　名
生年月日

右在監中改悛ノ狀顯著ナルヲ以テ明治何年何月何日ヨリ刑期滿限ノ日ニ至ル迄殘刑期何日間假出獄ヲ許可セラレタルニ付裏面ノ事項ヲ心得サセ此證票ヲ交付シ釋放ス

明治何年何月何日

何刑務所長官氏名印

八寸

五寸五分

（裏　面）

假出獄者心得事項

一　住居地ノ廳、郡、支廳又ハ警察官署ノ監督ヲ受クルコト
二　正業ニ就キ善行ヲ保ツコト
三　旅行三日以上ハ屆出ヲ爲シ十日以上ハ許可ヲ受クルコト
四　住居ヲ轉移スルトキハ許可ヲ受クルコト
五　旅行中天災、疾病等ノ爲メ臨時淹滯シタルトキハ其ノ地ノ管轄廳、郡、支廳又ハ警察官署ニ出頭シ之カ證明ヲ受クルコト
六　明治何年何月何日迄ニ何々地ヲ經テ其ノ居地ノ管轄何何廳、郡、支廳又ハ警察官署ニ到リ此ノ證票ヲ提出シ檢印ヲ受クルコト、若シ天災、疾病等ノ爲メ途中ニ淹滯シタルトキハ其ノ地ノ管轄廳、郡、支廳又ハ警察官署ニ出頭シ之カ證明ヲ受クルコト
七　假出獄取締規則ニ背キ又ハ罪ヲ犯シタルトキハ假出獄ヲ取消サルルコト

譯文

試准出獄囚犯須知

一　應奉居住地廳、郡、支廳或警察官署督理一款
二　應就正業兼修善行一款
三　出外如途三日以上應行具報如途十日以上應請允准一款
四　搬從居住節次應請允准一款
五　出外際時礙有天災患病等事不料淹留速應赴就地該管廳、郡、支廳或警察官署請領保認一款
六　迨明治某年某月某日爲限應經由某某等處地方赴該管居住地廳、郡、支廳或警察官署出具此項證憑請領驗訖印批遇有因天災患病等事在途上礙致淹留應赴就地該管廳、郡、支廳或警察官署請領允准一款
七　遇有違背試准出獄管束章程或敢犯科者應行裁鎖前經試准出獄一款

●拘留及勞役場留置者假出場證票書式

大正九年三月十四日
臺灣總督府訓令第二十四號

改正　大正一二年府令第八七號　**刑務所**

拘留及勞役場留置者假出場證票書式左ノ通相定ム

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

書式　用紙厚紙、紙質適宜

假出獄證票

本籍地
住居地
戸主又ハ誰何男、女、兄弟、妻何々
氏　名
生年月日

罪　名
拘留又ハ勞役場
留置期間
大正　年　月　日ヨリ執行
大正　年　月　日滿期
假出場期間　年　月　日（自大正　年　月　日　至大正　年　月　日）
假出場ヲ許サレタルヲ以テ此證票ヲ附與ス
年　月　日

何刑務所長　官　氏　名印

八寸

五寸五分

●警察官署ニ拘禁セラルル者ノ食料ニ關スル件

大正八年七月十七日
勅令第三百五十四號

朕警察官署ニ拘禁セラルル者ノ食料ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

警察官署ニ拘禁セラルル者ノ食料ハ內地ニ於テハ內務大臣、朝鮮、臺灣、樺太又ハ關東州ニ於テハ各朝鮮總督、臺灣總督、樺太廳長官又ハ關東長官ノ定ムル所ニ依ル

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十年勅令第二百六十三號ハ之ヲ廢止ス

●囚人、刑事被告人食費ニ關スル件

明治四十三年六月三十日
臺灣總督府令第五十六號

改正　大正七年府令第二三號、一一年第一五二號

警察官署ニ留置スル囚人、刑事被告人及其ノ他留置人ノ食費ハ一食八錢以內トシ知事又ハ廳長ニ於テ適宜其ノ額ヲ定ムルコトヲ得

附則

本令ニ牴觸スル從來ノ規定ハ之ヲ廢止ス

●【監獄】所用ノ帳簿諸表及其ノ樣式ニ關スル規程

〔臺轄〕

明治三十八年十二月
臺灣總督府訓令第二百四十二號

刑務所

改正　大正八年訓令第一一八號、九年第七五號、一〇年第二〇八號、一四年第三號

【監獄】所用帳簿、諸表及其ノ樣式ニ關スル規程左ノ通相定ム但シ別册ハ別ニ之ヲ頒ツ

【監獄】所用ノ帳簿、諸表及其ノ樣式ニ關スル規程

第一條　【監獄】所用ノ帳簿及諸表ハ別ニ定ムルモノヲ除ク外別册ノ樣式ニ依ルヘシ

第二條　【支監】ニ在リテハ事務ノ狀況ニ應シテ別册ノ帳簿及諸表ヲ適宜省略スルコトヲ得

第三條　各帳簿表紙ノ裏面ニハ左記ノ事項ヲ記載スヘシ

記帳主任
記帳事項
記帳期限
記帳例

第四條　ペンヲ以テ記入セムカ爲必要アルトキハ本令ノ規定ニ拘ラス洋紙ヲ使用スルコトヲ得

附則

本令ハ明治三十九年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十年一月訓令第三號ハ之ヲ廢止ス

附則（大正二年訓令第二百七十二號）

本令ハ大正三年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

左ニ記載シタルモノニ對シテハ當分ノ內從前ノ用紙ヲ使用スルコトヲ得

第八號ノ二　乙號日表
第九號　在監人索引簿
第十一號　身分帳
第二十號　入監受付票
第三十二號　笞刑執行始末書
第四十三號　看守以下勤務日表
第四十九號　在監者書信檢閱票
第五十號　親族表
第六十號　獨居房視察報告票
第六十五號　教誨原票
第六十六號　教育原票

第五十三號ノ二受刑者基票ハ特別ノ事情アル場合ニ限リ認可ヲ受ケ本樣式ニ依ラサルコトヲ得

（別册略之）

〔臺轄〕

●臺灣總督府看守及女監取締考査表ニ關スル規程

大正八年十一月十六日
臺灣總督府訓令第二百號

刑務所

改正　大正一二年府令第八七號

臺灣總督府看守及女監取締考査表ニ關スル規程左ノ通相定ム

臺灣總督府看守及女監取締考査表ニ關スル規程

第一條　看守及女監取締ノ進退賞罰ニ備フル爲刑務所ニ別記樣式ノ考査表ヲ設ケ六月每ニ其ノ視察シタル事項ヲ記入シ判定スヘシ

第二條　學術ノ成績ハ試驗ヲ行ヒ其ノ結果ヲ記入スヘシ但シ試驗ノ成績ハ百點ヲ以テ滿點トス

第三條　判定ハ最良、良、普通、不良ノ四種トス

第四條　考査表ハ祕密ノ取扱トシ本人他ノ刑務所ヘ轉勤シタルトキハ之ヲ當該刑務所長ニ送付スヘシ

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

（別記）

考査表

大正　年

擔任事務ノ大要		官職氏名年齢	
考査事項	前半期	後半期	
品性			
健康			
特技			
學術			
適所			
勤怠			

職務執行ノ當否		
服裝姿勢禮式		
其ノ他		
判定		

●臺灣總督府刑務所看守點檢規程

大正十四年二月二十日
臺灣總督府訓令第十五號

刑務所

臺灣總督府刑務所看守點檢規程左ノ通相定ム

臺灣總督府刑務所看守點檢規程

第一章　總則

第一條　看守ノ人員、服裝、姿勢、禮式、執銃、給與品及貸與品ハ本規程ニ依リ點檢スヘシ

第二條　點檢ヲ別チテ甲種點檢及乙種點檢ノ二種トス

甲種點檢ハ人員、服裝、姿勢、手帳（名刺ヲ含ム）、捕繩、呼子笛、刀身、禮式執銃ノ順序ニ依リ當日ノ勤務者ニ對シ服務時限前ニ於テ之ヲ行フ但シ刀身、禮式及執銃ノ點檢ハ時宜ニ依リ毎月一回迄ニ之ヲ減スルコトヲ得

乙種點檢ハ給與品及貸與品ノ員數、保存ノ當否及代料ヲ以テ支給スル物品ノ適否竝消防具ノ使用方ニ就キ毎月一回以上非番者ニ對シ之ヲ行フ

第三條　戒護係主任又ハ支所長ヲ點檢官トシ次席者ヲ指揮官トス但シ點檢官又ハ指揮官事故アルトキハ次席者ニ於テ順次之ヲ代理ス

刑務所長點檢ヲ行フトキハ戒護係主任又ハ支所長ヲ指揮官トス

第四條　點檢ハ各員ニ就キ嚴密ニ之ヲ行フヘシ

第五條　點檢ヲ行フヘキ場所及時限ハ豫メ之ヲ定メ定刻前ニ看守ヲ參集セシムヘシ

點檢ハ受檢者ヲ二列横隊ニ整列セシメ之ヲ行フヘシ但シ時宜ニ依リ適宜變更スルコトヲ得

第六條　點檢官ハ集合ノ順序竝方法ヲ左ノ如ク一定シ豫メ看守ヲシテ之ヲ心得置カシムヘシ

一　身幹長短ノ順序ニ從ヒ整列シ前列ト後列トノ距離ハ後列員ノ胸ヨリ前列員ノ脊迄八十五珊米トス

前後二人ヲ伍トシ列員奇數ナルトキハ左翼ノ後列員ヲ缺ク之ヲ缺伍トス

二　後列員ハ前列員ニ正シク重ナリ同方面ニ位置ス

三　各列員ノ間隔ハ左手ヲ以テ刀柄ヲ握リ左臗骨ノ上部ニ當テ肘ヲ側方ニ張リタルトキ左隣者ノ右肘ニ觸ルルヲ度トス

四　各伍ノ番號ハ前列員ニ於テ右ヨリ左ニ附ス

五　前列兩翼ニ各一名ノ嚮導ヲ置ク嚮導ハ看守部長ヲ以テ之ニ充ツ其ノ在ラサルトキハ上席看守ヲ以テ之ニ代フ

六　嚮導ニ充テラレタル以外ノ看守部長ハ後列ノ後方二步ノ距離ニ於テ列ノ長サニ均等セル後列中央員ニ重ナリ位置ス之ヲ押伍トス

第七條　號令ヲ別チテ豫令及動令トス豫令ハ明瞭ニ長ク動令ハ快活ニ短ク其ノ間適當ナル時間ヲ存スヘシ

第八條　指揮官ハ號令ヲ下ス際拔刀スルコトヲ得

第九條　點檢官點檢ヲ終リタルトキハ其ノ成績ヲ講評シ必要ナル訓示ヲ爲スヘシ但シ時宜ニ依リ之ヲ省略スルコトヲ得

第二章　甲種點檢

第十條　甲種點檢ヲ行フトキハ指揮官左ノ號令ヲ下シ看守ヲ集合セシムヘシ

集マレ（第五條第二項但書ノ場合ハ此ノ號令ヲ下シタル後集合隊形ヲ高聲ニテ指示ス）

此ノ號令ニテ右翼嚮導タルヘキ者ハ速ニ適當ノ場所ヲ選ミ指揮官ニ面シテ位置シ其ノ他ノ者ハ順次靜肅ニ嚮導ニ準ヒ指示セラレタル隊形ニ集合シ不動ノ姿勢ヲ取ルヘシ

不動ノ姿勢ハ兩踵ヲ一線上ニ揃ヘテ之ヲ著ケ兩足ハ約六十度ニ開キテ齊シク外ニ向ケ兩膝ハ凝ラスシテ之ヲ伸ハシ上體ハ正シク腰ノ上ニ落チ著ケ脊ヲ伸ハシ且少シク前ニ傾ケ兩肩ヲ稍後ニ引キ一樣ニ之ヲ下ケ左手ヲ以テ刀柄ヲ握リ拇指ヲ柄頭ニ當テ刀ヲ左足ト約十度ノ角度ニ保チ右臂ハ自然ニ垂レ掌ヲ股ニ接シ指ハ輕ク伸ハシテ之ヲ竝ヘ中指ヲ概ネ袴ノ縫目ニ當テ頸及頭ヲ眞直ニ保チ口ヲ閉チ兩眼ハ正シク之ヲ開キテ前方ヲ直視ス

第十一條　集合終レハ指揮官ハ順次左ノ號令ヲ下シ列員ヲ整頓スヘシ

一　番號

此ノ番號ニテ前列右翼首位ノ者ヨリ順次自己ノ番號ヲ唱ヘツツ左翼ニ至ル

二　嚮導三步（二步、四步）前ヘ

此ノ號令ニテ兩翼嚮導ハ（五）ノ要領ニテ前進スヘシ

指揮官ハ駈步ニテ右翼嚮導ノ右側二步ノ所ニ立チ兩翼嚮導ヲ一線上ニ位置セシメ列員整頓ノ基準線ヲ作ルヘシ

三　右（左）ヘ準ヘ

此ノ號令ニテ列員ハ（五）ノ要領ニテ前進シ最後ノ一步ヲ少シク縮メ整頓線ノ後方ニ止マリ左手ハ刀柄ヲ左臗骨ノ上部ニ當テ肘ヲ側方ニ張リ上體ヲ前後ニ出スコトナク頭ヲ右（左）ニ向ケ右眼（左眼）ヲ以テ隣員ヲ目視シ他眼ヲ以テ全線ヲ通視シ得ル迄小步ヲ以テ靜ニ整頓線ニ就クヘシ

整頓翼ノ嚮導ハ速ニ整頓ノ基礎ヲ定ムル爲反對翼ノ嚮導ヲ目標トシテ己ニ近キ者ヨリ順次其ノ線ヲ正スヘシ仍必要アルトキハ反對翼ノ嚮導ハ整頓ヲ補助スヘシ

四　直レ

此ノ號令ニテ列員ハ頭ヲ正面ニ復シ同時ニ左手ヲ舊位ニ復スヘシ

五　前列五步（六步、七步）前ヘ　進メ

此ノ號令ニテ左股ヲ少シク上ケ脚ヲ前ニ出シ右足ヨリ七十五珊米ノ所ニ脚ヲ伸ハシツツ踏ミ著ケ同時ニ概ネ膕ヲ伸ハシ全ク體ノ重ミヲ之ニ移ス左足ヲ踏ミ著クルト同時ニ右足ヲ地ヨリ離シ左脚ニ就キテ示セシ如ク右脚ヲ前ニ出シテ踏ミ著ケ頭ヲ眞直ニ保チ右臂ヲ自然ニ振リ一分時間ニ百十四步ヲ基準トシテ行進シ終レハ特ニ指示セラレタル場合ノ外直ニ頭ヲ右ニ向ケ右翼ニ準ヒテ整頓シ順次頭ヲ正面ニ復スヘシ

第十二條　前條ノ動作終レハ指揮官ハ左ノ號令ヲ下シ列員ヲ休憩セシメ點檢官ノ指示ヲ待ツヘシ但シ列員ニ休憩セシメスシテ直ニ第十四條ノ點檢ニ著手スルモ妨ナシト雖此ノ場合ニ於テハ指揮官ハ點檢官ニ相當ノ敬禮ヲ行ヒタル後受檢人員ヲ報告スヘシ

休メ

此ノ號令ニテ列員ハ先ツ左足ヲ出シ爾後片足ヲ舊ノ所ニ置キ其ノ場ニ立チテ休憩ス

休憩中ト雖許可ナクシテ談話スルコトヲ得ス

第十三條　點檢官ノ指示アリタルトキハ指揮官ハ左ノ號令ヲ下シ直ニ點檢官ニ相當ノ敬禮ヲ行ヒタル後受檢人員ヲ報告スヘシ

一　氣ヲ著ケ

此ノ號令ニテ列員ハ一齊ニ且迅速ニ不動ノ姿勢ニ復ス

第十四條　刀身ノ點檢ヲ行フトキハ左ノ號令ヲ下スヘシ但シ人員ノ多少又ハ場所ノ廣狹ニ依リ適宜ノ號令ヲ以テ距離・間隔ヲ取ラシムルモ妨ナシ

一　奇數員（偶數員）三步前ヘ　進メ

此ノ號令ニテ指示サレタル列員及兩翼嚮導ハ第十一條（五）ノ要領ニテ前進スヘシ

前項ノ場合ニ在リテハ右翼嚮導ハ左ヘ一步左翼嚮導ハ右ヘ一步ノ間隔ヲ取ルヘシ

二　拔ケ　刀

豫令ニテ左手ヲ以テ刀緒ヲ撮ミ右手ヲ之ニ貫キタル後更ニ左手ヲ以テ第一鐶ノ所ヲ握リ同時ニ右手ヲ以テ刀柄ヲ握リ約一寸ヲ拔ク

動令ニテ刀身ヲ鞘ヨリ拔キ右臂ヲ右足尖ノ方向ニ水平ヨリ稍高ク伸ハシ手ノ甲ヲ上ニシ刄ヲ右ニ向ケ刀尖ヲ概ネ眼ノ高サニ保チ之ニ注目シ恰モ玆ニ一節ヲ示スカ如クシテ速ニ肩刀ヲ爲シ頭ヲ正面ニ復ス

肩刀ノ法ハ刀ノ柄ヲ右手ノ拇指ト食指及中指トノ間ニ保チ他ノ二指ヲ刀柄ノ外ニ附シ其ノ手ヲ右髖骨ノ稍下方ニ著ケ肘ヲ輕ク後方ニ引キ刀身ヲ垂直ニ立テ刀背ヲ肩ニ托ス

三　收メ　刀

豫令ニテ小指、無名指ヲ他ノ二指ニ併セテ刀柄ヲ握ル

動令ニテ之ヲ腮ノ前方約三寸ノ所ニ上ケ刀身ヲ垂直ニ刀背ヲ右ニ鍔ヲ口ノ高サニ齊シクシ肘ハ自然ニ體ニ接ス次ニ右肘ヲ上ケテ刀ヲ左方ニ倒シ頭ヲ稍左ニ傾ケ眼ヲ鯉口ニ注キ刀尖ヲ鞘ニ入レ迅速ニ而モ音響ノ發セサル如ク鞘ニ收メタル後頭ヲ正面ニ復シ同時ニ右手ヲ下ケ左手ヲ以テ刀柄ヲ握リ不動ノ姿勢ニ復ス

四　偶數員（奇數員）三步前ヘ　進メ

此ノ號令ニテ第十一條（五）ノ要領ニテ前進シ元ノ列位ニ復スヘシ

第十五條　攜帶品ノ點檢ヲ行フトキハ左ノ號令ヲ下スヘシ

一　手帳

此ノ號令ニテ列員ハ右手ヲ以テ手帳ヲ取出シ左手ヲ添ヘテ印章ヲ押捺シアル部分ヲ開キ（名刺五枚以上ヲ名刺入ニ納メ鉛筆ヲ鉛筆差ニ差シタル儘）之ヲ前方ニ差出シ右手ノ諸指ヲ握リテ拇指ト食指トノ間ニ深ク其ノ中央ヲ挾ミ肘ハ輕ク體ニ接シ前臂ハ之ヲ水平ニ保チ前方ニ出シ左手ハ刀柄ヲ握ル

二　收メ

此ノ號令ニテ列員ハ速ニ左手ヲ添ヘテ手帳ヲ閉チ右手ヲ以テ之ヲ收ムヘシ

三　捕繩

此ノ號令ニテ右手ヲ以テ捕繩ヲ取リ出シ解キ口ヲ前方上部ニ向ケテ之ヲ握リ（一）ノ要領ニテ前方ニ出ス

四　解ケ

此ノ號令ニテ列員ハ左手ニテ解キ口ヲ撮ミテ約一尺ヲ解舒シ更ニ右手ヲ以テ其ノ中間ヲ反對ニ握リ右肩上ニ持來リ強ク右足先ノ方向ニ投出シテ之ヲ解キ其ノ儘（一）ノ要領ニテ前方ニ出ス

五　收メ

此ノ號令ニテ左手ヲ添ヘテ假ニ取纏メ右手ヲ以テ之ヲ收ムヘシ

六　呼子笛

此ノ號令ニテ列員ハ右手ニテ呼子笛ヲ取リ出シ橫孔ヲ下方ニ向ケ拇指ト食指ヲ以テ之ヲ保持シ（一）ノ要領ニテ前方ニ出ス

七　吹ケ

此ノ號令ニテ前列一番ヨリ順次長ク一聲ニ吹鳴シ直ニ（六）ノ姿勢ニ復ス

點檢官必要アリト認ムルトキハ吹キ方ヲ指定シ受檢者ノ全部又ハ一部ヲシテ吹鳴セシムルコトヲ得

八　收メ

此ノ號令ニテ列員ハ速ニ之ヲ收ム

第十六條　禮式ノ點檢ヲ行フトキハ指揮官ハ前後列ヲ適當ノ距離ニ開キテ對向セシメ各個ノ敬禮ニ就キ適宜指示ヲ與ヘ指揮官又ハ列ノ一方ヲ以テ受禮者ニ擬シ各其ノ右翼ヨリ之ヲ行フ停止間ノ敬禮ヲ終リタル者ハ其ノ舊位ニ復シ行進間ノ敬禮ヲ終リタル者ハ對面列員ノ背後ニ立ツ

第一項ノ點檢終リタルトキハ指揮官ハ列員ヲ整頓シ適宜指示ヲ與ヘ隊伍ノ敬禮ヲ點檢ニ供スヘシ

第十七條　執銃ノ點檢ハ大正十三年訓令第五十三號臺灣總督府州、廳巡查點檢規程第十三條及同年訓令第五十四號臺灣總督府警察操典第一編第一章四執銃ノ規定ヲ準用ス

第十八條　點檢ヲ終ヘ列員ヲ解散セシムルトキハ左ノ號令ヲ下スヘシ

解レ

此ノ號令ニテ列員ハ點檢官ニ對シ一齊ニ敬禮ヲ爲シ靜ニ解散スヘシ

第三章　乙種點檢

第十九條　乙種點檢ヲ行フニハ豫メ其ノ場所ヲ定メ置キ指揮官ハ適宜受檢者ノ位置及物品排列ノ順序ヲ指示スヘシ

受檢者ハ指示セラレタル位置ニ就キ物品ヲ排列シタル上其ノ位置ニ於テ姿勢ヲ正シ點檢ヲ待ツヘシ但シ指揮官ハ第十二條ノ要領ニ依リ列員ヲシテ休憩セシムルモ妨ナシト雖各員ハ自己ニ屬スル物品ノ點檢ヲ受クルニ付テハ直ニ姿勢ヲ正スヘシ

第二十條　物品ノ排列終レハ點檢官ハ列ノ右翼ヨリ順次各品ニ就キ嚴密ニ點檢スヘシ

第二十一條　點檢官ハ帽、衣、袴、外套、肌著、長靴、短靴、肩章、提燈等一切ノ給與品及貸與品ノ員數、保存ノ當否及代料ヲ以テ支給スル物品ノ適否竝手帳ノ記事ヲ檢査シ若シ破綻、汚損其ノ他不都合ト認ムルモノアルトキハ猶豫ナク相當ノ處置ヲ爲スヘシ

手帳ノ記事ヲ點檢シタル場合ニ於テハ列員ハ其ノ最終記事ノ所ニ點檢年月日ヲ記入シ點檢官ハ同所ニ認印ヲ押捺シ置クヘシ

第一項ノ點檢ハ時宜ニ依リ物品ノ一部ニ就キ又ハ適宜ノ方法ニ依リ之

ヲ行フコトヲ得

第二十二條　點檢終レハ指揮官ハ左ノ號令ヲ下スヘシ

一　纏メ

此ノ號令ニテ列員ハ排列シタル物品ヲ假ニ取纏ムヘシ

二　解レ

此ノ號令ニテ列員ハ點檢官ニ敬禮ヲ行ヒ物品ヲ携帶シ解散スヘシ

第二十三條　消防具使用ノ點檢ヲ行フトキハ指揮官ハ適宜ノ號令又ハ指示ヲ以テ列員ヲシテ動作セシムヘシ

消防具ノ破損アリタルトキハ點檢官ハ猶豫ナク修覆ノ手續ヲ爲スヘシ

第二十四條　本令ハ女監取締及押丁ノ點檢ニ之ヲ準用ス

附　則

明治四十一年訓令第二十五號臺灣總督府監獄看守點檢規程ハ之ヲ廢止ス

●臺灣押送規則

明治三十四年二月二十三日
臺灣總督府令第五號

改正　明治三四年府令第五五號、第九二號、三五年第三號、大正一二年第八七號、昭和二年第五二號

臺灣押送規則左ノ通相定ム

臺灣押送規則

第一條　受刑者、留置者、被告人及被疑者ノ押送ハ沿道警察官署ノ遞傳ニ付スルモノトス但發送官署又ハ押送官署ノ都合ニ依リ直送ヲ爲スハ妨ケナシ

第二條　汽車又ハ汽船ノ便アル地方間ノ押送ハ其汽車又ハ汽船ニ依リ難キ特別ノ事由アル場合ヲ除ク外總テ直送スヘキモノトス

第三條　刑務所本支所間ノ押送ハ司獄官吏ヲシテ直送セシムヘシ但十里以上ニシテ汽車汽船ノ便ナキ地方ニアリテハ第一條ニ依ルコトヲ得

第四條　直送ヲ爲ス場合ニ於テ途中特ニ危險ノ虞アリト認メタルトキハ沿道警察官署又ハ憲兵屯所ニ助力ヲ求ムルコトヲ得

第五條　押送ノ場合ニ於テハ發送官署ハ其發送前豫メ最後ニ送付ヲ受クヘキ官署ニ押送人員及發送日時ヲ通知スヘシ

遞傳押送ニ係ル場合ニ於テハ發送官署及各押送官署ハ豫メ前項ノ事項ヲ次ニ送付ヲ受クヘキ官署ニ通知スルヲ要ス

第六條　押送ノ場合ニ於テハ發送官署ハ別記雛形ノ樣式ニ從ヒ押送狀ヲ作リ被押送者ノ身上ニ關スル書類其他必要ノ書類ヲ添ヘ被押送者ト共ニ押送官吏ニ交付スヘシ

第七條　押送官署ニ於テハ別記雛形ノ押送帳簿ヲ備ヘ押送ニ關スル要項ヲ記載スヘシ

第八條　被押送者ノ所持スル貨幣物品ニシテ本人ト同時ニ送致スルモノハ別記雛形ノ樣式ニ從ヒ送致金品目錄ヲ調製シ左ノ例ニ依リ取扱フヘシ

一　物品ハ押送官吏ニ託シテ之ヲ押送ス但危險ノ虞アル物品若ハ押送官吏ノ携帶ニ堪ヘサル物品ハ此限ニ在ラス

二　貨幣ハ郵便爲替又ハ銀行爲替ヲ以テ之ヲ送致ス但シ五圓未滿ノ金額若ハ押送期間一日以上ニ亙ラサル場合ハ之ヲ押送官吏ニ託スルコトヲ得

第九條　送致中ニ係ル貨幣物品ハ前條ニ依リ押送官吏ニ託スル場合ニ於テハ押送ヲ爲ス各官署ノ保管ニ屬シ押送官吏ニ託セサル場合ニ於テハ發送官署ノ保管ニ屬ス

第十條　押送ハ日出前日沒後ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得ス但第二條ノ場合ハ此限ニアラス

第十一條　疾病者及姙娠者若ハ分娩後一箇月ヲ經過セサル者ハ押送前醫師ヲシテ診察セシメ其押送ニ堪ヘスト認メラレタル者ハ押送ヲ爲スコトヲ得ス此場合ニ於テハ押送ヲ求メタル官署ニ其旨ヲ通知スヘシ

第十二條　押送中逃走者アルトキハ押送官吏ハ直ニ之ヲ附近ノ各警察官署憲兵屯所及押送官署ニ通報シ押送官署ハ仍發送官署及最後ニ送付ヲ受クヘキ官署ニ之ヲ通知シ第六條第八條ノ書類及金品ヲ發送官署ニ返付スヘシ

第十三條　押送官吏ノ旅費其他押送ニ要スル費用ハ押送ヲ爲ス各官署ノ支辨トス但第四條ニ依リ助力ニ應シタル官吏ノ費用ハ其官署ノ支辨トス

第十四條　被押送者ハ汽車又ハ汽船中ニ在ル場合ノ外警察官署ニ宿泊セシムヘシ但シ時宜ニ依リ刑務所ニ宿泊セシムルコトヲ得

前項ノ場合ニ宿泊セシメ難キ事由アルトキハ其地ノ警察官吏又ハ街庄社長ニ協議シ宿所ヲ定ムルコトヲ得

第十五條　被押送者ヲ警察官署ニ宿泊セシムルトキハ其費用ハ留置人ノ例ニ依リ其他ニ宿泊セシメ又ハ飲食セシムル場合ニ於テハ凡テ實費額ニ依ル但臥具點燈料其他宿泊ノ費用ハ一泊金八拾錢食費ハ一回金五拾錢ヲ超ユルコトヲ得ス

第十六條　被押送者ノ貨幣物品ハ押送途中之ヲ下付スルコトヲ得ス但被告人又ハ被疑者豫メ自費ヲ以テ押送途中必要ナル物品又ハ飲食物ノ購求ヲ請フトキハ警察官署ハ必要ノ有無其他ノ關係ヲ取糺シテ之ヲ許否スヘシ

判官又ハ檢察官ノ命ニ依ル被押送者ニ對シ前項ノ購求ヲ必要ト認ムルトキハ發送官署ハ豫メ領置金支出方ニ付當該判官又ハ檢察官ノ允許ヲ受ケ其旨ヲ押送狀ニ記入スヘシ

第十七條　前條ニ依リ購求シタル物品又ハ飲食物ノ代價ハ其保管ノ金錢ヲ以テ之ヲ支辨シ本人ノ承認書ヲ徵スヘシ

第十八條　押送中被押送者發病シタルトキハ速ニ相當ノ手當ヲ爲スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ押送官吏ハ警察官吏又ハ街庄社長ノ助力ヲ求ムルコトヲ得但止ムヲ得サル事由アルトキハ被押送者ヲ最寄警察官署ニ交付スルコトヲ得此場合ニ於テハ交付ヲ受ケタル官署ニ於テ更ニ押送ノ手續ヲ爲スヘシ

第十九條　押送中被押送者死亡シタルトキハ最寄警察官署ニ交付スヘシ

汽車汽船中ニアリテ死亡シタルトキハ最初ノ著船地又ハ停車地ノ警察官署ニ交付スヘシ但已ムヲ得サル場合ニ於テハ其他ノ著船地又ハ停車地ノ警察官署ニ交付スルコトヲ得

第二十條　被押送者ノ遺骸ノ交付ヲ受ケタル警察官署ハ醫師ノ死亡證書ヲ徵シ死亡ノ年月日時、場所、病名及死因ヲ本籍廳長（內地人ハ市町村長外國人ハ領事）發送官署及最後ニ送付ヲ受クヘキ官署ニ通知シ仍第六條第八條記載ノ書類及其金品ヲ發送官署ニ返付スヘシ

第二十一條　被押送者ノ遺骸ハ引取人アルトキハ直ニ之ヲ下付スヘシ但

二十四時間内ニ其引取人ナキトキハ假埋葬ノ手續ヲ爲スヘシ假埋葬ノ費用ハ假埋葬ヲ爲シタル官署ノ支辨トス

（別記雛形）

番號	
組番號	押送狀

人相		
丈		耳
體格		髭鬚
髮眉		額
目		顏色
鼻		語訛
口		異徵
齒		

原籍、族籍

寄留地

身分及職業（藝名綽名アルトキハ記入）

罪質、刑名刑期

氏名

年齡

（被告人又ハ被疑者ナルトキハ事件名）

本人ハ………（事由ヲ記ス）ニ依リ………（地名、官署名）ニ交付スルカ爲押送セシメ候條可然御取計相成度候也

年　月　日

發送官署

發送押送官吏及主任官吏認印	發送到着日時	押送ノ方法及注意スヘキ事項	被押送者ノ身體ノ狀況	押送中ノ行狀	本欄ニハ物品購求ニ關スル允許其他逃走死亡等アルニ際シ其旨ヲ記載スヘシ
	發……				
	到……				

番號	
組番號	送致金品目錄

貨幣	一金額……… 一…何々購求 一…何々ニ使用	計金………
物品　携帶物品	一何々　何箇 一何々　何箇	計何點
物品　保管スル物品	一何々　何箇 一何々　何箇	計何點
各發送押送官署ノ印		

記載例

一　數人同時ニ押送ヲ爲ストキハ被押送者ノ員數ト等シキ組番號ヲ付シ其内順次ニ數ヲ付スルモノトス例ヘハ八人ノ被押送者ニ對シテハ八號ノ一、八號ノ二トナスカ如シ押送帳簿ニ於ケル組番號モ亦此例ニ依ル

二　發送押送官署名及主任官吏認印ノ欄ニ於テハ刑務所又ハ警察官署ノ長之カ認印ヲ押捺スルモノトス

押送帳簿（被押送者一人ニ付半葉トス）

番號	押送狀番號	組番號	押送狀作製ノ年月日
			【明治】年　月　日

族籍

氏名

罪質、刑名刑期

年齡

（被告人又ハ被疑者ナルトキハ事件名）

發送官署名	押送シ來リタル官署名	送付官署名	最後ニ送付ヲ受クヘキ官署名	押送シ來リタル首席官吏氏名及押送官吏員數	發送及到著日時
					到著【明治】年　月　日午前午後　時 發送【明治】年　月　日午前午後　時

送致金品		押送方法		食糧給與ノ度數及其代價
金額	點數	到著前	到著後	
本欄ニハ金額竝ニ會計ニ關スル帳簿ノ頁數又ハ番號ヲ掲記スヘシ	本欄ニハ點數竝ニ物品帳簿ノ頁數又ハ番號ヲ掲記スヘシ			

備考
本欄ニハ被押送者ニシテ發病死亡逃走其他ノ事故アルニ際シ詳細ニ其旨ヲ明記シ且所持金品ノ處分方等ヲ掲クルモノトス

第五章　訴願　請願

●訴願法ヲ臺灣ニ施行スルノ件

大正十一年三月二十八日
勅令第五十一號

朕訴願法ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　訴願法ハ郡參事會、市參事會及府縣參事會ニ關スル規定ヲ除クノ外之ヲ臺灣ニ施行ス但シ同法中各省大臣トアルハ臺灣總督、其省又ハ各省トアルハ臺灣總督府トス

第二條　訴願書ハ國語ヲ以テ之ヲ認ムヘシ

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●訴願法

明治二十三年十月十日
法律第百五號

朕訴願法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

訴願法

第一條　訴願ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外左ニ揭クル事件ニ付之ヲ提起スルコトヲ得

一　租稅及手數料ノ賦課ニ關スル事件
二　租稅滯納處分ニ關スル事件
三　營業免許ノ拒否又ハ取消ニ關スル事件
四　水利及土木ニ關スル事件
五　土地ノ官民有區分ニ關スル事件
六　地方警察ニ關スル事件

其他法律勅令ニ於テ特ニ訴願ヲ許シタル事件

第二條　訴願セントスル者ハ處分ヲ爲シタル行政廳ヲ經由シ直接上級行政廳ニ之ヲ提起スヘシ

訴願ノ裁決ヲ受ケタル後更ニ上級行政廳ニ訴願スルトキハ其裁決ヲ爲シタル行政廳ヲ經由スヘシ

國ノ行政ニ付此法律ニ依リ郡參事會又ハ市參事會ノ處分若クハ裁決ニ對シテ訴願セントスル者ハ其處分若クハ裁決ヲ爲シタル郡參事會又ハ市參事會ヲ經由シテ府縣參事會ニ之ヲ提起スヘシ

第三條　各省大臣ノ處分ニ對シ訴願セントスル者ハ其省ニ之ヲ提起スヘシ

第四條　裁判所ノ裁判各省ノ裁決及第二條第三項府縣參事會ノ裁決ヲ經タルモノハ其事件ニ付更ニ訴願スルコトヲ得ス

第五條　訴願ハ文書ヲ以テ之ヲ提起スヘシ

訴願書ノ侮辱誹毀ニ渉ルモノハ之ヲ受理セス

第六條　訴願書ハ其不服ノ要點理由要求及訴願人ノ身分職業住所年齡ヲ記載シ之ニ署名捺印スヘシ

訴願書ニハ證據書類ヲ添ヘ竝下級行政廳ノ裁決ヲ經タルモノハ其裁決書ヲ添フヘシ

第七條　多數ノ人員共同シテ訴願セントスルトキハ其訴願書ニ各訴願人ノ身分職業住所年齡ヲ記載シ署名捺印シ其中ヨリ三名以下ノ總代人ヲ選ヒ之ニ委任シ總代委任ノ正當ナルコトヲ證明スヘシ

法律ニ依リ法人ト認メラレタル者ハ其名ヲ以テ訴願ヲ提起スルコトヲ得

第八條　行政處分ヲ受ケタル後六十日ヲ經過シタルトキハ其處分ニ對シ訴願スルコトヲ得ス

行政廳ノ裁決ヲ經タル訴願ニシテ其裁決ヲ受ケタル後三十日ヲ經過シタルモノハ更ニ上級行政廳ニ訴願スルコトヲ得ス

行政廳ニ於テ宥恕スヘキ事由アリト認ムルトキハ期限經過後ニ於テモ仍之ヲ受理スルコトヲ得

第九條　法律勅令ニ依リ訴願ヲ提起スヘカラサルモノナルカ又ハ適法ノ手續ニ違背スルモノナルトキハ之ヲ却下ス

其訴願書ノ方式ヲ缺クニ止マルモノハ期限ヲ指定シテ還付スヘシ

第十條　訴願書ハ郵便ヲ以テ之ヲ差出スコトヲ得

郵便遞送ノ日數ハ第八條ノ訴願期限內ニ之ヲ算入セス

第十一條　第二條第一項ノ場合ニ於テ訴願書ノ經由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ十日以內ニ辯明書及必要文書ヲ添ヘ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ

第二條第二項ノ場合ニ於テ訴願書ノ經由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ三日以內ニ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ

第二條第三項ノ場合ニ於テ訴願書ヲ發送スルトキ亦前二項ノ例ニ依ルヘシ

第十二條　訴願ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外行政處分ノ執行ヲ停止セス但行政廳ハ其職權ニ依リ又ハ訴願人ノ願ニ依リ必要ナリト認ムルトキハ其執行ヲ停止スルコトヲ得

〔秦輯〕

第十三條　訴願ハ口頭審問ヲ爲サス其文書ニ就キ之ヲ裁決ス但行政廳ニ於テ必要ナリト認ムルトキハ口頭審問ヲ爲スコトヲ得

第十四條　訴願ノ裁決ハ文書ヲ以テ之ヲ爲シ其理由ヲ付スヘシ訴願ヲ却下スルトキ亦同シ

第十五條　訴願ノ裁決書ハ其處分ヲ爲シタル行政廳ヲ經由シテ之ヲ訴願人ニ交付スヘシ訴願書ヲ却下スルトキ亦同シ

第十六條　上級行政廳ニ於テ爲シタル裁決ハ下級行政廳ヲ覊束ス

第十七條　訴願ノ手續ニ關シ他ノ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノハ各其規程ニ依ル

附則

第十八條　明治十五年十二月第五十八號布告請願規則ハ此法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第十九條　此法律施行ノ前請願規則ニ依リ受理シタル請願ハ仍其規則ニ依リ之ヲ處分ス

請願規則ニ依リ下級行政廳ノ指令ヲ受ケタル者訴願スルヲ得ヘキ場合ニ於テ更ニ訴願セントスルトキハ此法律ニ從ヒ其上級行政廳ニ之ヲ提起スヘシ

第二十條　第八條ノ訴願期限ハ此法律施行ノ前行政處分ヲ受ケ又ハ請願規則ニ依リ指令ヲ受ケタル事件ニシテ其處分又ハ指令ヲ受ケタル日ヨリ滿五年ヲ經過セサルモノニ對シテハ此法律施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第二十一條　行政廳ニ呈出スル請願ハ此法律ニ依ルノ限ニ在ラス

●請願令

（大正六年四月五日　勅令第三十七號）

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ請願令ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

請願令

第一條　請願ハ法律勅令ニ別段ノ規定アルモノヲ除クノ外本令ニ依リ之ヲ爲スヘシ

第二條　請願ハ文書ヲ以テ之ヲ爲スヘシ

請願書ニハ侮辱誹毀ニ渉リ又ハ秩序風俗ヲ紊ル文辭ヲ用ウルコトヲ得ス

第三條　請願書ノ文字ハ端正鮮明ナルコトヲ要ス

第四條　請願書ニハ請願ノ要旨、理由、年月日、請願者ノ族稱、職業、住所、年齢ヲ記載シ請願者各自之ニ署名捺印スヘシ

第五條　法人請願者ナルトキハ其ノ名稱及住所ヲ記載シ法定ノ代表者各自請願書ニ署名捺印スヘシ

第六條　法人ハ其ノ目的ノ遂行ニ關係アル事項ニ非サレハ請願ヲ爲スコトヲ得ス

第七條　未成年者及禁治産者ノ請願ハ其ノ法定代理人ニ於テモ之ヲ爲スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ請願書ニ代理ノ事由及法定代理人ノ族稱、職業、住所、年齢ヲ記載シ法定代理人之ニ署名捺印スヘシ

第八條　署名スルコト能ハサル者ハ他人ヲシテ代署セシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ代署者請願書ニ其ノ事由ヲ附記シ且其ノ族稱、職業、住所、年齢ヲ記載シ之ニ署名捺印スヘシ

〔秦輯〕

第九條　請願ハ第七條ノ場合ヲ除クノ外代理人ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ得ス

第十條　天皇ニ奉呈スル請願書ハ封皮ニ請願ノ二字ヲ朱書シ內大臣府ニ宛テ其ノ他ノ請願書ハ請願ノ事項ニ付職權ヲ有スル官公署ニ宛テ郵便ヲ以テ差出スヘシ

第十一條　左ニ掲クル事項ニ付テハ請願ヲ爲スコトヲ得ス

一　皇室典範及帝國憲法ノ變更ニ關スル事項

二　裁判所ニ干預スル事項

第十二條　相當ノ敬禮ヲ守ラス又ハ本令ノ規定ニ違反スル請願書ハ之ヲ却下ス但シ官公署ニ對スル請願書ハ第三條乃至第五條、第七條第二項又ハ第八條ノ規定ニ違反スルモ之ヲ却下セサルコトヲ得

第十三條　請願ニ對シテハ指令ヲ與ヘス

第十四條　天皇ニ奉呈スル請願書ハ內大臣奏聞シ旨ヲ奉シテ之ヲ處理ス

第十五條　請願ニ關シ官公署ノ職員ニ强テ面接ヲ求メタル者ハ二月以下ノ禁錮若ハ五十圓以下ノ罰金又ハ拘留若ハ科料ニ處ス

二人以上共ニ前項ノ罪ヲ犯シタルトキハ六月以下ノ禁錮又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十六條　行幸ノ際沿道又ハ行幸地ニ於テ直願ヲ爲サムトシタル者ハ一年以下ノ懲役ニ處ス行啓ノ際沿道又ハ行啓地ニ於テ直願ヲ爲サムトシタル者亦同シ

第十七條　請願ヲ爲サシムル爲他人ヲ誘惑若ハ煽動シ又ハ名義ノ何タルヲ問ハス請願ニ關スル運動ノ爲金錢其ノ他ノ利益ヲ收受シ、要求シ若ハ其ノ收受ヲ約束シタル者ハ六月以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

다5P14

14:7
165
가5P14

昭和四年一月二十八日印刷
昭和四年二月一日發行

（加除自在）臺灣
法令輯覽
奥　附

臺灣總督府編纂

發行者　（株式會社帝國地方行政學會取締役社長）大谷仁兵衞
東京市京橋區加賀町九番地

印刷者　井田耕治
東京市京橋區加賀町九番地

印刷所　行政學會印刷所
東京府荏原郡荏原町戸越五百五番地

發行所
東京市京橋區加賀町九番地
臺北市御成町五丁目六番地
電話四一六番・振替臺灣三九四一番
帝國地方行政學會
同臺灣出張所